

有 価 証 券 報 告 書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事 業 年 度	自	平成29年4月1日
(第 71 期)	至	平成30年3月31日

株式会社小林洋行

東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目15番7号

(E03723)

目次

頁

表紙

第一部	企業情報	1
第1	企業の概況	1
	1. 主要な経営指標等の推移	1
	2. 沿革	3
	3. 事業の内容	4
	4. 関係会社の状況	6
	5. 従業員の状況	7
第2	事業の状況	8
	1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	8
	2. 事業等のリスク	9
	3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	11
	4. 経営上の重要な契約等	18
	5. 研究開発活動	18
第3	設備の状況	19
	1. 設備投資等の概要	19
	2. 主要な設備の状況	19
	3. 設備の新設、除却等の計画	20
第4	提出会社の状況	21
	1. 株式等の状況	21
	(1) 株式の総数等	21
	(2) 新株予約権等の状況	21
	(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	21
	(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	21
	(5) 所有者別状況	21
	(6) 大株主の状況	22
	(7) 議決権の状況	22
	2. 自己株式の取得等の状況	23
	3. 配当政策	23
	4. 株価の推移	23
	5. 役員の状況	24
	6. コーポレート・ガバナンスの状況等	27
第5	経理の状況	34
	1. 連結財務諸表等	35
	(1) 連結財務諸表	35
	(2) その他	67
	2. 財務諸表等	68
	(1) 財務諸表	68
	(2) 主な資産及び負債の内容	76
	(3) その他	76
第6	提出会社の株式事務の概要	77
第7	提出会社の参考情報	78
	1. 提出会社の親会社等の情報	78
	2. その他の参考情報	78
第二部	提出会社の保証会社等の情報	79

[監査報告書]

[内部統制報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月29日
【事業年度】	第71期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）
【会社名】	株式会社小林洋行
【英訳名】	KOBAYASHI YOKO CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 細金 成光
【本店の所在の場所】	東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目15番7号
【電話番号】	03（3669）4111（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役業務部長 渡辺 宏
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目15番7号
【電話番号】	03（3669）4111（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役業務部長 渡辺 宏
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第67期	第68期	第69期	第70期	第71期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
営業収益 (千円)	3, 078, 376	3, 121, 617	3, 499, 940	3, 227, 797	3, 255, 464
(うち受取手数料) (千円)	(1, 418, 854)	(1, 568, 753)	(1, 210, 640)	(1, 354, 086)	(1, 344, 109)
経常損失 (△) (千円)	△412, 596	△179, 101	△109, 478	△353, 142	△272, 771
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 (△) (千円)	28, 834	171, 205	△563, 637	△128, 458	△178, 886
包括利益 (千円)	△177, 865	222, 478	△828, 096	△220, 604	△183, 568
純資産額 (千円)	10, 699, 024	10, 888, 661	10, 024, 667	9, 768, 166	9, 548, 917
総資産額 (千円)	14, 714, 801	15, 678, 875	13, 882, 682	14, 208, 181	14, 929, 414
1株当たり純資産額 (円)	982. 34	996. 77	911. 80	896. 97	888. 94
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 (△) (円)	3. 05	18. 13	△59. 68	△13. 60	△18. 94
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	63. 0	60. 0	62. 0	59. 6	56. 2
自己資本利益率 (%)	0. 31	1. 83	△6. 25	△1. 50	△2. 12
株価収益率 (倍)	84. 59	18. 64	—	—	—
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	88, 721	△330, 208	△235, 939	221, 286	32, 036
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△310, 556	△126, 238	267, 342	△218, 991	△170, 020
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	167, 149	△49, 841	△27, 810	△6, 296	△56, 394
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	2, 450, 350	1, 944, 061	1, 947, 654	1, 943, 653	1, 749, 274
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	142 (49)	163 (50)	136 (47)	138 (45)	140 (44)

(注) 1. 営業収益には消費税等は含まれておりません。

2. 第69期、第70期及び第71期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、1株当たり当期純損失であるため、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。第67期及び第68期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第69期、第70期及び第71期の株価収益率については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第67期	第68期	第69期	第70期	第71期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
営業収益 (千円)	233, 111	303, 863	283, 780	331, 894	331, 075
経常損失 (△) (千円)	△148, 454	△158, 796	△127, 488	△49, 942	△46, 944
当期純利益又は当期純損失 (△) (千円)	158, 115	213, 943	△232, 736	△44, 615	△31, 631
資本金 (千円)	2, 000, 000	2, 000, 000	2, 000, 000	2, 000, 000	2, 000, 000
発行済株式総数 (株)	10, 094, 644	10, 094, 644	10, 094, 644	10, 094, 644	10, 094, 644
純資産額 (千円)	7, 964, 333	8, 139, 331	7, 715, 054	7, 642, 305	7, 695, 107
総資産額 (千円)	8, 575, 911	8, 733, 857	8, 162, 509	8, 060, 773	8, 143, 307
1 株当たり純資産額 (円)	843. 28	861. 82	816. 89	809. 19	814. 78
1 株当たり配当額 (うち 1 株当たり中間配当額) (円)	普通配当2. 5 (一)	普通配当2. 5 (一)	普通配当2. 5 (一)	普通配当2. 5 (一)	普通配当2. 5 (一)
1 株当たり当期純利益又は 1 株当たり当期純損失 (△) (円)	16. 74	22. 65	△24. 64	△4. 72	△3. 35
潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	92. 9	93. 2	94. 5	94. 8	94. 5
自己資本利益率 (%)	1. 98	2. 66	△2. 94	△0. 58	△0. 41
株価収益率 (倍)	15. 41	14. 92	—	—	—
配当性向 (%)	14. 93	11. 04	—	—	—
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	11 (2)	7 (2)	5 (3)	5 (3)	5 (3)

(注) 1. 営業収益には、消費税等は含まれておりません。

2. 第69期、第70期及び第71期の潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額については、1 株当たり当期純損失であるため、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。第67期及び第68期の潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第69期、第70期及び第71期の株価収益率及び配当性向については、1 株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

2 【沿革】

年月	事項
昭和24年 3 月	甘栗の輸入販売、和菓子の製造・販売を目的として、東京都中央区日本橋蛸殻町に株式会社小林洋行を設立
昭和27年 9 月	東京穀物商品取引所に商品仲買人登録
昭和46年 1 月	昭和42年の商品取引所法改正による登録制から許可制への移行に伴い、農林大臣（現・農林水産大臣）及び通商産業大臣（現・経済産業大臣）から商品取引員の許可を取得
昭和55年 1 月	商品取引所法改正により商品取引員の許可制度が導入され、商品取引員の許可を更新
昭和61年11月	商品取引員である株式会社 藤富（現・株式会社フジトミ）に資本参加
平成 3 年 4 月	商品取引員である田山株式会社を吸収合併
平成 7 年 8 月	商品取引所法に基づく第一種商品取引受託業の許可更新を受ける
平成 9 年 9 月	日本証券業協会に株式を店頭登録
平成11年 4 月	株式会社共和トラストを設立（商品先物取引業）
平成11年 7 月	株式会社共和トラストは山梨商事株式会社（商品先物取引業）を吸収合併
平成12年 1 月	当社株式の一単位の株式数を1,000株から500株に変更
平成12年 3 月	東京証券取引所市場第二部上場
平成12年 8 月	当社株式の一単位の株式数を500株から100株に変更
平成12年 8 月	日本電子証券株式会社（大阪証券取引所正会員）を子会社化
平成12年10月	株式会社フジトミが日本証券業協会に株式を店頭上場
平成13年 8 月	商品取引所法に基づく第一種商品取引受託業の許可更新を受ける
平成13年 9 月	東京証券取引所市場第一部に指定替えとなる
平成14年 5 月	株式会社フジトミが丸梅株式会社に資本参加
平成14年 9 月	株式会社フジトミが丸梅株式会社を100%子会社化
平成16年 2 月	株式会社日本ゴルフ倶楽部を子会社化
平成17年 3 月	資本金を20億円に変更
平成17年 3 月	農林水産大臣及び経済産業大臣より、商品取引所法（昭和25年法律第239号）第190条第1項の規定に基づき、商品取引受託業務の許可を受ける
平成18年 5 月	日本電子証券株式会社は、フェニックス証券株式会社に商号を変更する
平成18年10月	株式会社コバヤシコーポレーションを設立
平成19年 4 月	金融先物取引業に係る許可を取得（（金先）第175号）
平成19年 9 月	金融商品取引法の施行に伴い金融商品取引業者として登録（（金商）第269号）
平成22年 3 月	商品取引受託業務を廃止
平成22年 4 月	SEOコンサルティングサービスに係る事業を開始
平成23年 3 月	丸梅株式会社は商品取引受託業務を廃止（平成23年 4 月25日に解散を決議、平成24年 3 月23日に清算終了）
平成23年 4 月	自己ディーリングに係る事業を廃止
平成23年 5 月	取引所為替証拠金取引に係る事業を吸収分割により岡安商事株式会社に承継させる
平成23年 5 月	店頭為替証拠金取引に係る事業を廃止
平成23年 6 月	SEOコンサルティングサービスに係る事業を吸収分割により株式会社コバヤシコーポレーションに承継させ、同社は株式会社小林洋行コミュニケーションズに商号を変更する
平成23年 6 月	第一種金融商品取引業及び第二種金融商品取引業を廃止
平成23年 7 月	持株会社体制に移行
平成25年 1 月	フェニックス株式会社（旧・フェニックス証券株式会社）は金融商品取引業を廃止し、解散を決議（平成25年 5 月29日に清算終了）
平成27年 2 月	株式会社三新電業社及び看板資材株式会社を100%子会社化
平成27年 2 月	株式会社フジトミがHIGH END株式会社（現・BLUE EARTH株式会社（平成27年 4 月22日付で商号変更））の第三者割当により発行した新株式の一部を引受けたことにより、当社の持分法適用関連会社となる
平成27年 9 月	株式会社共和トラストは商品先物取引業を廃止し、解散を決議（平成27年12月28日に清算終了）
平成28年 6 月	監査役会設置会社から監査等委員会設置会社に移行
平成29年 7 月	株式会社フジトミがエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社（現・ふくろう少額短期保険株式会社（平成30年 3 月 1 日付で商号変更））の発行済株式の99.12%を取得し、子会社化

3【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社（株式会社小林洋行）、子会社6社及び関連会社1社により構成されており、投資・金融サービス業を主たる業務としております。

当社グループの事業内容及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

なお、次の5部門は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項（セグメント情報等）」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

1. 投資・金融サービス業

(1) 商品先物取引業

当部門は、商品先物取引法に基づき国内の商品取引所に上場されている各種の商品先物取引について、受託業務及び自己売買業務を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社フジトミ

(2) 金融商品取引業

当部門は、金融商品取引法に基づく金融商品取引業の登録を受けて、株式会社東京金融取引所で上場している取引所為替証拠金取引（くりっく365）及び取引所株価指数証拠金取引（くりっく株365）を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社フジトミ

(3) その他

当部門は、金地金販売等を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社フジトミ

2. 生活・環境事業

(1) 生命保険・損害保険の募集

当部門は、生命保険の募集業務及び損害保険代理店業務を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社フジトミ

(2) 少額短期保険業

当部門は、少額短期保険の開発・募集等を行っております。

主な関係会社

子会社 ふくろう少額短期保険株式会社

(3) 太陽光発電機・LED照明等の販売事業

当部門は、太陽光発電機・LED照明等の販売事業等を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社フジトミ

株式会社三新電業社

関連会社 BLUE EARTH株式会社

(4) 電設資材卸売

当部門は、広告用電設資材の卸売業務等を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社三新電業社

看板資材株式会社

3. スポーツ施設提供業

当部門は、ゴルフ場関連事業として当社が保有しているゴルフ場施設の運営等を行っております。

主な関係会社

子会社 株式会社日本ゴルフ倶楽部

(1) 不動産賃貸業

子会社 株式会社フジトミ

子会社 株式会社フジトミ

子会社 株式会社小林洋行コミュニケーションズ

[illegible]

⇒ は、経営管理。

- 5 -

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (千円)	主要な事業の内容	議決権 の所有 割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ㈱フジトミ (注) 1. 2	東京都中央区	1,200,000	商品先物取引業 金融商品取引業	53.63	役員の兼任あり。 不動産賃貸あり。
㈱日本ゴルフ倶楽部 (注) 7	東京都中央区	90,000	ゴルフ場関連事業	100.00 (17.64)	役員の兼任あり。 不動産賃貸あり。
㈱小林洋行コミュニケー ションズ	東京都中央区	60,000	インターネット広告業	100.00	役員の兼任あり。
ふくろう少額短期保険㈱ (注) 4. 5. 6	東京都千代田区	40,000	少額短期保険業	99.81 (99.81)	—
㈱三新電業社 (注) 7	東京都練馬区	30,000	広告用電設資材卸売業	100.00	役員の兼任あり。
看板資材㈱	東京都練馬区	500	インターネット通信販売業	100.00	役員の兼任あり。
(持分法適用関連会社) BLUE EARTH㈱	東京都千代田区	300,000	LED商品等の開発、製造 及び販売業	30.00 (30.00)	—

(注) 1. 特定子会社に該当しております。

2. 有価証券報告書を提出しております。

3. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。

4. 株式会社フジトミは、平成29年7月6日付でエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社の発行済株式の99.12%を取得し、連結子会社としております。

5. 平成30年3月1日付で、エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社は、商号をふくろう少額短期保険株式会社に変更しております。

6. ふくろう少額短期保険株式会社は、平成30年3月29日付で290百万円の減資を行い、株式会社フジトミは、同日付でふくろう少額短期保険株式会社の第三者割当により発行した新株式26千株を引受けました。これに伴い、同社の資本金は40百万円、議決権の所有割合は99.81%となっております。

7. 株式会社日本ゴルフ倶楽部及び株式会社三新電業社については、営業収益（連結会社相互間の内部営業収益を除く）の連結営業収益に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等

㈱日本ゴルフ倶楽部

㈱三新電業社

(1) 営業収益	442,638千円	666,901千円
(2) 営業利益	3,790千円	40,852千円
(3) 当期純利益	5,520千円	31,848千円
(4) 純資産額	187,086千円	326,059千円
(5) 総資産額	347,264千円	807,125千円

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成30年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）	
投資・金融サービス業	75	(4)
生活・環境事業	29	(6)
スポーツ施設提供業	8	(28)
不動産業	2	(一)
その他	8	(2)
全社（共通）	18	(4)
合計	140	(44)

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数（パート、嘱託及び派遣社員を含む。）は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 全社（共通）として、記載されている従業員数は、特定の事業に区分できない管理部門に所属しているものです。

(2) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（円）
5 (3)	46.6	21.3	5,734,491

セグメントの名称	従業員数（人）	
全社（共通）	5	(3)
合計	5	(3)

(注) 1. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

2. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数（パート、嘱託及び派遣社員を含む。）は（ ）内に年間の平均人員を外数で記載しております。

3. 全社（共通）として、記載されている従業員数は、特定の事業に区分できない管理部門に所属しているものです。

(3) 労働組合の状況

当社には労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社グループは、投資・金融サービス業（商品先物取引、金融商品取引）、生活・環境事業（生命保険、損害保険の募集、少額短期保険業、太陽光発電機・LED照明等の販売事業、広告用電設資材卸売業）、スポーツ施設提供業（ゴルフ場関連事業）、不動産業（不動産賃貸業、宅地建物取引業）、その他（インターネット広告業、コンピューターハードウェア・ソフトウェアの販売）を事業領域としております。各事業部門ともにお客様の視線に立った公正・公平で誠実な経営を心がけてまいります。また、社会の責任ある一員として、順法精神と倫理観を大切に、価値ある商品・サービスを提供することにより、すべてのステークホルダーの皆様とともに、豊かな社会の実現に寄与してまいります。

また、当社グループの業績は、営業総利益の大半を投資・金融サービス業が占めており、なかでも商品先物取引の受取手数料が当社グループの収益源となっております。国内の商品市場は、平成16年の法改正（平成17年5月施行）以降、低迷が続いており、平成30年3月期の総売買高（先物オプション取引を含む。）は、51,379千枚と市場が活況であった平成16年3月期の83.5%も少ない水準にあります。当社グループといたしましては、国内の商品市場の活性化や発展に寄与するように努め、商品取引所の売買高の早期回復を目標に邁進してまいります。

(2) 経営戦略等

当社グループでは、不採算事業で将来性の見込めない部門からは早期に撤退を進め、事業再編・組織再編やM&Aなど機動的な再編を行い、安定した収益源の確保に向けて積極的な経営戦略に取り組んでまいります。

また、当社グループの業績については、事業環境の低迷によって平成19年3月期より続いている営業利益での赤字から脱却し黒字転換を実現するために、経営資源の適切な配分かつリスク管理の徹底に努めながら、安定した経営体制の確立に取り組んでまいります。

(3) 経営環境

国内経済につきましては、今後も雇用・所得環境が改善し、景気拡大はさらに継続していくことが予想されます。一方で、米中貿易摩擦の激化、シリア問題等における欧米とロシアの対立、各国の金融政策正常化等の影響により、株価、為替、資源等の価格変動リスクが混在し、当社グループを取り巻く経営環境は先行き不透明に推移していくことが予想されます。

(4) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループの主たる事業である投資・金融サービス業は、商品市況、株式市況、為替相場等の変動に大きな影響を受ける傾向にあり、先行き不透明な事業環境なかで今後の見通しを判断することが困難となっております。このような不確定要因が混在している業種の特異性から、経営上の目標の達成を判断するための客観的な指標等はありませんが、継続的な営業損失から脱却することが当社グループの最優先事項であります。

(5) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社グループが置かれている経営環境は、厳しい環境が続いていることから、経営資源の最適な配分を図るために、グループ事業の選択・再構築を推し進めております。このような状況のもと、対処すべき課題は、次のとおりであります。

《投資・金融サービス業》

当社グループの営業総利益のうち、投資・金融サービス業への依存度が最も高くなっていることから、当該事業の拡大が最優先課題となっております。新たな事業の柱として金融商品取引業を今後大きく成長させるために、マーケット環境や顧客のニーズに応じた投資セミナーを開催するなどサービスの質的向上を図り、同取引の顧客層を拡大させ、安定的な収益基盤の確保に努めてまいります。

《生活・環境事業》

保険募集業務では、生損保のクロスセリングの推進や代理店事業と少額短期保険業とのシナジー効果の強化に力を入れ、契約件数の増加に努めてまいります。また、LED照明等の販売及び広告用電設資材卸売業につきましては、2020年の東京オリンピックに向け更なる需要が見込めるなか、新たな顧客の開拓に重点を置いた営業活動を行い、お客様のニーズに応じた提案をすることで顧客基盤の拡充に努めてまいります。

《スポーツ施設提供業》

スポーツ施設提供業では、周辺のゴルフ場との差別化を図るため、より質の良いサービスの提供に注力し、売上・来場者の増加に繋げてまいります。

《不動産業》

不動産業のうち、不動産賃貸では、当社グループの所有不動産を賃貸することにより安定した収益の確保に努め、不動産売買では、慎重かつ収益性を重視した仕入や販売を行い、リスクを分散しながらバランス良く投資してまいります。

これらの既存事業以外にも、継続的に安定した収益が期待できる事業分野に関しましては新規参入を、不採算事業に関しましてはスピーディーな撤退・再編等を含めて検討してまいります。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資家の判断に重要な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資の判断をする上で、重要であると考えられる事項については、積極的な情報開示の観点から以下に記載するとおりであります。また、当社グループはこれらのリスク発生要因を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める所存であります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

① 市況による影響について

当社グループの営業総利益のうち商品先物取引における受取手数料が約40%を占めております。当該取引は相場商品を取引の対象としていることから、受取手数料は国内外の金融市場の動向や経済情勢の影響を受けやすい傾向にあり、結果、当社グループの業績に大きな影響を与える可能性があります。また、これらの要因により長期間にわたって商品市場における売買高の低迷や減少が続いた場合には、当社グループの収益に影響を及ぼす可能性があります。

なお、金融商品取引（くりっく365及びくりっく株365）の受取手数料は、当社グループの営業総利益の約19%を占めております。当該取引におきましても、為替市場や株式市場の市況動向の影響を受ける傾向があります。

② ディーリング業務について

当社グループでは、受託業務に伴う流動性を確保するマーケットメーカーとしての役割及び積極的に収益機会を獲得するために自己の計算による商品先物取引を行っております。当社グループの営業収益のうち、売買損益とは当該業務による商品先物取引等の売買に伴う損益を指しますが、自己玉については、建玉の数量制限など商品取引所毎に市場管理基本要綱が定められております。また、当社グループは自己ディーリング業務運用規程などによる厳しい社内規程に基づきリスク管理を行っております。なお、当社グループでは金融商品取引のディーリング業務も行っております。また、これらのディーリング業務につきましては、取引対象が相場商品であることから、市場動向を見誤った場合や不測の自体が生じた場合等には、当初想定していないリスクが顕在化し、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

③ 法的規制及び改定等による新たな規制の導入について

当社グループの主事業である商品先物取引は、商品先物取引法、同施行令、同施行規則などの関連法令、日本商品先物取引協会が定めた自主規制ルールなどの適用を受けております。また、これらの他に消費者契約法や個人情報保護法などの適用を受けております。金融商品取引（くりっく365及びくりっく株365）は、金融商品取引法を中心とした法令・諸規則の適用を受けております。なお、財務の健全性を測る指標の一つとして純資産額規制比率（商品先物取引法）、自己資本規制比率（金融商品取引法）の制度があり、それぞれに規制比率を120%以上維持することが義務付けられております。

これらの適用法令に抵触した場合には、許認可及び登録の取消し、業務停止などの行政処分等が行われることがあり、そのような場合には当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

④ 個人情報について

当社グループは、業務遂行上の必要性から多くの個人情報をコンピュータシステムなどによって取扱っております。当社グループは、個人情報の管理について、個人情報保護管理責任者を設置し、個人情報保護規程や社内システム管理規程等を設けるとともにコンピュータシステムのセキュリティ強化にも努めており、また役職員への啓蒙活動を行い、当該情報の管理に万全を期しております。

しかしながら、万が一、外部からの不正アクセスなど何らかの方法により個人情報が漏洩した場合には、当社グループはその責任を問われると同時に社会的な信用を失う恐れがあり業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑤ コンピュータシステムについて

当社グループは、お客様からのホームトレードシステムや金融商品取引（くりっく365及びくりっく株365）ツールによる売買注文の受付、商品取引所への売買注文の発注をはじめ、多くの業務でコンピュータシステムを利用しております。当社グループは、費用対効果を考慮しつつ、システム投資を行い安定稼働に努めておりますが、回線障害、機器の誤作動、プログラムの不備、不正アクセス、自然災害などによりシステムに障害が発生した場合、当社グループの業務に支障が生じ、その規模によっては、業績に重大な影響を受ける可能性があります。

⑥ 訴訟について

当社の連結子会社である株式会社フジトミが受託した商品先物取引に関して3件の損害賠償請求事件が現在係争中であります。これは、当該会社の不法行為により損害を被ったとして、当該会社を被告として損害賠償請求を裁判所に提訴したものであり、損害賠償請求額は、23,753千円であります。これに対して当該会社は、何ら不法行為は無かったことを主張しております。

⑦ 事業活動を継続するとの前提に重要な疑義を生じさせるような事象について

当社グループの営業総利益の大半を占めている投資・金融サービス業におきましては、平成16年の法改正（平成17年5月施行）以降、低迷が続いている国内商品取引所の総売買高（先物オプション取引を含む。）は、市場が活況であった平成16年3月期（311,670千枚）と比較すると、平成30年3月期（51,379千枚）は83.5%も少ない水準にあり、引き続き厳しい経営環境に直面しております。当社グループにおきましても、当連結会計年度は、営業損失344百万円（前連結会計年度は営業損失210百万円）、経常損失は272百万円（前連結会計年度は経常損失353百万円）と引き続き損失を計上しており、親会社株主に帰属する当期純損失は178百万円（前連結会計年度は親会社株主に帰属する当期純損失128百万円）となっております。これにより、将来にわたって事業活動を継続するとの前提に重要な疑義を生じさせるような事象または状況が存在しております。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概況は次のとおりであります。

①財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、企業収益や雇用・所得環境の改善が続くなかで、消費者マインドの持ち直しなど景気は緩やかな回復を持続してきました。一方で、米中の対立が端を発する貿易摩擦や国際的に深刻化する地政学的リスクへの不安感が米国株式市場を乱高下させる要因となり、その影響が日経平均や円相場を不安定にさせるなど、先行きは引き続き不透明な状況にあります。

当社グループの主たる事業である投資・金融サービス業において、前半は夏場の北朝鮮による弾道ミサイル発射や核実験などによる地政学的リスクの高まりが、後半においては米長期金利の急騰や米中の貿易摩擦を契機とした世界同時株安の影響による円高ドル安の進行が、金や白金のボラティリティを高め、国内貴金属市場の売買高は前期比8.2%増となりました。しかしながら、貴金属市場以外の商品市場は、強弱材料に乏しくボラティリティの低い環境が長く続いたため、取引は総じて低調に推移しました。その結果、国内商品取引所の総売買高は、前期と比較して0.5%減の51,379千枚となりました。また、国内の株式市場においては、好調な企業収益に株価が支えられ、一時日経平均は平成30年1月23日に24,129円34銭を記録しましたが、米国株安や円高懸念の影響により短期間で3,000円超下落し、3月26日に20,347円49銭を付けたあと、21,000円付近を推移する値動きとなりました。

生活・環境事業においては、高騰する電気料金やリニューアル需要によりLED照明等の需要は依然高水準で推移しております。また、国内の生損保市場は、生保は低金利環境の影響で貯蓄性商品が減少し、損保は新種保険の好調を背景に拡大しております。

これらの事業以外においては、ゴルフ場は、ゴルフ人口の減少の影響で来場者数の確保に苦戦を強いられるなか、人件費の高騰が追い打ちをかけ、厳しい事業環境となりました。不動産業では、外国人観光客数は、アジア圏からの訪日客が増加しており、東京や大阪などの都市圏では、ホテルの客室稼働率が依然高水準にあります。また、賃貸用マンションは、都市圏で需要が伸びているものの供給過多の影響で空室率は増加傾向にあります。

このような事業環境のもと、投資・金融サービス業においては、株式会社フジトミの主力である商品先物取引の受取手数料は794百万円（前連結会計年度比27.7%減）と減少しましたが、同社が平成28年1月から取扱いを開始した取引所為替証拠金取引（くりっく365）及び取引所株価指数証拠金取引（くりっく株365）は順調に売買高を伸ばしており、受取手数料は376百万円（同237.1%増）と大幅に増加しました。その結果、投資・金融サービス業の受取手数料は1,171百万円（同3.2%減）となりました。また、自己ディーリング部門は、53百万円の売買損（前連結会計年度は48百万円の売買損）となっております。

生活・環境事業において、生命保険・損害保険事業では、募集手数料は173百万円（前連結会計年度比20.3%増）、平成29年7月6日より当社の連結子会社に加わったふくろう少額短期保険株式会社が営む少額短期保険業の保険料等収入などの売上高は47百万円となりました。また、太陽光発電機・LED照明等の売上高174百万円（同1.7%増）や株式会社三新電業社が営む広告用電設資材卸売業の売上高509百万円（同0.7%減）などを加えた、生活・環境事業の売上高は927百万円（同5.4%増）となっております。

スポーツ施設提供業においては、当社が所有するゴルフ場（ゴールドエンクロスカントリークラブ）ですが、5月、6月は近隣のゴルフ場間の価格競争の激化や悪天候の影響で、売上、来場者数ともに前年を大きく下回りましたが、後半は、料金設定の見直しやサービスの向上など営業活動に注力し前半の遅れを挽回した結果、売上高は442百万円（同1.7%減）となっております。

不動産業において、不動産賃貸では、当社グループが所有する賃貸用不動産は、引き続き入居率、稼働率ともに高水準にあり、安定した収益源となっております。また、不動産売買では、短期に収益を獲得できる案件に加え、収益物件を新築し賃貸や転売により収益の増加に注力しました。その結果、売上高は618百万円（同4.7%増）となり、その他の事業を含めた営業収益は3,255百万円（同0.9%増）、営業総利益は1,982百万円（同0.6%減）となっております。

一方、営業費用は2,326百万円（同5.5%増）となり、営業損失344百万円（前連結会計年度は営業損失210百万円）、経常損失272百万円（前連結会計年度は経常損失353百万円）となりました。また、負ののれん発生益16百万円などの特別利益54百万円、固定資産除売却損48百万円やシステム移行費用29百万円などの特別損失91百万円を計上したため、親会社株主に帰属する当期純損失は178百万円（前連結会計年度は親会社株主に帰属する当期純損失128百万円）となりました。

セグメントの業績は、次のとおりです。

a 投資・金融サービス業

当連結会計年度の投資・金融サービス業の営業収益は1,118百万円（前連結会計年度比3.7%減）、セグメント損失は229百万円（前連結会計年度は115百万円のセグメント損失）となりました。

当連結会計年度における投資・金融サービス業の営業収益は、次のとおりであります。

イ 受取手数料

区分	金額（千円）	前年同期比（%）
商品先物取引		
現物先物取引		
農産物市場	22,473	△25.5
貴金属市場	608,946	△31.9
ゴム市場	14,050	△14.3
石油市場	28,839	△20.4
小計	674,310	△31.0
現金決済取引		
石油市場	13,760	94.8
貴金属市場	106,038	△6.8
小計	119,798	△0.9
商品先物取引計	794,108	△27.7
金融商品取引		
取引所株価指数証拠金取引	308,987	216.5
取引所為替証拠金取引	67,907	378.6
金融商品取引計	376,894	237.1
合計	1,171,003	△3.2

（注）上記の金額には消費税等は含まれておりません。

ロ 売買損益

区分	金額（千円）	前年同期比（%）
商品先物取引		
現物先物取引		
農産物市場	3,778	—
貴金属市場	12,500	△63.5
ゴム市場	3,862	—
石油市場	△32,446	—
小計	△12,305	—
現金決済取引		
石油市場	△41,290	—
貴金属市場	530	—
小計	△40,760	—
商品先物取引計	△53,065	—
金融商品取引トレーディング損益	—	—
合計	△53,065	—

（注）上記の金額には消費税等は含まれておりません。

ハ その他

区分	金額（千円）	前年同期比（%）
その他（情報提供報酬等）	190	△39.3
合計	190	△39.3

（注）上記の金額には消費税等は含まれておりません。

当社グループの商品先物取引及び金融商品取引の売買高に関して当連結会計年度中の状況は、次のとおりであります。

ニ 商品先物取引の売買高の状況

市場名	委託（枚）	前年同期比（%）	自己（枚）	前年同期比（%）	合計（枚）	前年同期比（%）
現物先物取引						
農産物市場	13,026	△13.2	960	△51.3	13,986	△17.7
貴金属市場	150,904	△19.6	14,312	2.9	165,216	△18.1
ゴム市場	12,452	△39.3	140	△78.2	12,592	△40.4
石油市場	20,190	△1.4	720	△64.5	20,910	△7.1
小計	196,572	△19.4	16,132	△13.1	212,704	△18.9
現金決済取引						
石油市場	10,782	6.6	1,040	△51.0	11,822	△3.4
貴金属市場	114,136	△8.9	3,726	—	117,862	△6.0
小計	124,918	△7.8	4,766	116.8	129,684	△5.8
合計	321,490	△15.2	20,898	0.7	342,388	△14.4

（注）１．主な商品別の委託売買高とその総委託売買高に対する割合は、次のとおりです。

前連結会計年度 自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日				当連結会計年度 自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日			
取引所名	銘柄名	委託売買高（枚）	割合（%）	取引所名	銘柄名	委託売買高（枚）	割合（%）
㈱東京商品取引所	金	129,792	34.2	㈱東京商品取引所	金	104,745	32.6
	金ミニ	61,689	16.3		金限日	67,551	21.0
	白金	56,653	14.9		白金	44,177	13.7
	金限日	56,517	14.9		金ミニ	36,492	11.4
	ゴム	20,499	5.4		ガソリン	19,642	6.1

２．商品先物取引における取引単位の最低単位を枚と呼び、例えば㈱東京商品取引所の金は１枚1kg、ガソリンは１枚50k lというように1枚当たりの数量は商品ごとに異なります。

ホ 金融商品取引の売買高の状況

区分	委託（枚）	前年同期比（%）	自己（枚）	前年同期比（%）	合計（枚）	前年同期比（%）
取引所株価指数証拠金取引	88,280	230.7	—	—	88,280	230.1
取引所為替証拠金取引	87,508	279.9	—	—	87,508	279.9
小計	175,788	253.5	—	—	175,788	253.1

当社グループの商品先物取引及び金融商品取引に関する売買高のうち、当連結会計年度末において反対売買により決済されていない建玉の状況は、次のとおりであります。

ヘ 商品先物取引の未決済建玉の状況

市場名	委託（枚）	前年同期比（%）	自己（枚）	前年同期比（%）	合計（枚）	前年同期比（%）
現物先物取引						
農産物市場	543	△18.8	—	—	543	△18.8
貴金属市場	4,872	△17.6	—	—	4,872	△18.3
ゴム市場	359	△17.1	—	—	359	△27.2
石油市場	415	△5.9	—	—	415	△26.0
小計	6,189	△17.0	—	—	6,189	△19.5
現金決済取引						
石油市場	210	26.5	—	—	210	39.3
貴金属市場	10,854	15.7	—	—	10,854	15.7
小計	11,064	15.9	—	—	11,064	13.7
合計	17,253	1.5	—	—	17,253	△0.9

ト 金融商品取引の未決済建玉の状況

区分	委託 (枚)	前年同期比 (%)	自己 (枚)	前年同期比 (%)	合計 (枚)	前年同期比 (%)
取引所株価指数証拠金取引	9,356	145.6	—	—	9,356	145.6
取引所為替証拠金取引	6,661	405.8	—	—	6,661	405.8
小計	16,017	212.4	—	—	16,017	212.4

b 生活・環境事業

当連結会計年度の生活・環境事業の営業収益は927百万円（前連結会計年度比5.4%増）、セグメント損失は50百万円（前連結会計年度は13百万円のセグメント損失）となりました。

区分	金額 (千円)	前年同期比 (%)
広告用電設資材卸売業	509,733	△0.7
太陽光発電機・LED照明等の販売事業等	174,900	1.7
生命保険・損害保険の募集	173,106	20.3
少額短期保険業	47,817	—
映像コンテンツ配信業務	9,468	△75.0
その他	12,674	△0.3
合計	927,699	5.4

(注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

2. 映像コンテンツ配信業務につきましては、平成29年7月28日付で運営先に事業譲渡し、当該事業を廃止しております。

c スポーツ施設提供業

当連結会計年度のスポーツ施設提供業の営業収益は442百万円（前連結会計年度比1.7%減）、セグメント利益は14百万円（同14.9%減）となりました。

d 不動産業

当連結会計年度の不動産業の営業収益は618百万円（前連結会計年度比4.7%増）、セグメント利益は236百万円（同4.0%増）となりました。

区分	金額 (千円)	前年同期比 (%)
不動産販売収入	369,447	9.8
不動産賃貸料収入	248,951	△2.1
合計	618,398	4.7

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

e その他

当連結会計年度のインターネット広告業などの営業収益は148百万円（前連結会計年度比2.4%増）、セグメント利益は22百万円（同29.2%増）となりました。

財政状態については次のとおりです。

当連結会計年度の総資産は14,929百万円、純資産は9,548百万円、自己資本比率は56.2%、1株当たり純資産額は888.94円となっております。

②キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における連結ベースのキャッシュ・フローは、営業活動による収入32百万円（前連結会計年度は221百万円の収入）、投資活動による支出170百万円（前連結会計年度は218百万円の支出）及び財務活動による支出56百万円（前連結会計年度は6百万円の支出）でありました。この結果、当連結会計年度末の現金及び現金同等物は1,749百万円（前連結会計年度末比194百万円減）となりました。当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は以下のとおりです。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度において営業活動の結果得た資金は、32百万円となりました。これは主に、たな卸資産の減少45百万円の計上等によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度において投資活動の結果使用した資金は、170百万円となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出286百万円の計上等によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度において財務活動の結果使用した資金は、56百万円となりました。これは主に、長期借入金の返済による支出20百万円及び配当金の支払額23百万円の計上によるものであります。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。
なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

①重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成に当たりまして、当社グループは、過去の実績及び判断により合理的と考えられる数値に基づいて評価及び見積りを行っております。ただし、見積りによる不確実性のため異なる結果となる可能性があり、実際の結果はこれらの見積りと異なる場合があります。

②当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの当連結会計年度の経営成績等は次のとおりであります。

(営業収益)

営業収益は、受取手数料1,344百万円（前年同期比9百万円減）、売買損益△53百万円（前年同期比4百万円減）、売上高1,903百万円（前年同期比5百万円減）、その他の営業収益60百万円（前年同期比47百万円増）となりました。当社グループの中核事業である投資・金融サービスにおいて商品先物取引の受取手数料は794百万円（前年同期比304百万円減）となりましたが、金融商品取引の受取手数料は376百万円（前年同期比265百万円増）と大幅に増加しました。売上高は、生活・環境事業927百万円、スポーツ施設提供業442百万円、不動産業618百万円、その他148百万円であります。

(営業費用)

厳しい経営環境が続いている状況をふまえて事業経費の見直しを進めておりますが、営業費用は2,326百万円（前年同期比121百万円増）となりました。主な営業費用の内訳は、人件費が1,415百万円（前年同期比3百万円増）、電算機費が98百万円（前年同期比11百万円増）、広告宣伝費が83百万円（前年同期比27百万円増）取引所関係費が63百万円（前年同期比21百万円増）であります。

(営業損益)

営業費用の増加により営業損失は344百万円（前連結会計年度は営業損失210百万円）となりました。

(経常損益)

経常損失は272百万円（前連結会計年度は経常損失353百万円）となりました。

(親会社株主に帰属する当期純損益)

負ののれん発生益16百万円などの特別利益54百万円、固定資産除売却損48百万円やシステム移行費用29百万円などの特別損失91百万円の計上により、親会社株主に帰属する当期純損失は178百万円（前期は親会社株主に帰属する当期純損失128百万円）となりました。

区分	前連結会計年度 自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日		当連結会計年度 自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日	
	金額（百万円）	営業収益に占める割合（％）	金額（百万円）	営業収益に占める割合（％）
営業収益	3,227	100.0	3,255	100.0
内訳 受取手数料	1,354	42.0	1,344	41.3
売買損益	△48	△1.5	△53	△1.6
売上高	1,909	59.2	1,903	58.5
その他の営業収益	13	0.4	60	1.9
売上原価	1,234	38.2	1,273	39.1
営業費用	2,204	68.3	2,326	71.5
営業損失（△）	△210	△6.5	△344	△10.6
経常損失（△）	△353	△10.9	△272	△8.4
親会社株主に帰属する当期純損失（△）	△128	△4.0	△178	△5.5

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因につきましては、「第2 事業の状況 2 事業等のリスク」の項目をご参照ください。

(資産、負債及び純資産の状況)

当連結会計年度末の総資産額は、前期末と比べ721百万円増加し14,929百万円となりました。これは主に、差入保証金の増加875百万円によるものであります。

負債総額は、前期末と比べ940百万円増加し5,380百万円となりました。これは主に、預り証拠金の減少514百万円及び受入保証金の増加1,326百万円によるものであります。

純資産額は、親会社株主に帰属する当期純損失178百万円及び非支配株式に帰属する当期純損失147百万円の計上により、9,548百万円となりました。

当社グループの資本の財源及び資金の流動性については次のとおりであります。

(キャッシュ・フロー)

当社グループの資金状況につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ②キャッシュ・フローの状況」の項目をご参照ください。

(契約債務)

平成30年3月31日現在の契約債務の概要は以下のとおりであります。

	年度別要支払額 (千円)				
契約債務	合計	1年以内	1年超3年以内	3年超5年以内	5年超
短期借入金	100,000	100,000	—	—	—
長期借入金	121,800	20,400	40,800	40,800	19,800

上記の表において、貸借対照表の短期借入金に含まれている1年内返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めております。

(財務政策)

当社グループは、運転資金及び設備資金につきましては、内部資金または金融機関からの借入により資金調達することとしております。このうち、借入による資金調達に関しましては、運転資金については短期借入金で、賃貸不動産に係る設備投資などの長期資金は、固定金利の長期借入金で調達しております。

平成30年3月31日現在、長期借入金の残高は121,800千円であります。また、当事業年度末において、複数の金融機関との間で合計480,000千円の当座貸越契約を締結しております(借入実行残高100,000千円、借入未実行残高380,000千円)。

セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

(投資・金融サービス業)

売上高は、商品先物取引の受取手数料794百万円(前連結会計年度比27.7%減)、金融商品取引の受取手数料376百万円(同237.1%増)、自己ディーリング部門の53百万円の売買損(前連結会計年度は48百万円の売買損)により1,118百万円(同3.7%減)となりました。

セグメント損益は手数料収入等の減少43百万円、営業費用の増加79百万円により229百万円の損失(前連結会計年度は115百万円の損失)となりました。

セグメント資産は差入保証金の増加875百万円等により、前連結会計年度に比べ505百万円増加の6,659百万円となりました。

(生活・環境事業)

売上高は、ふくろう少額短期保険株式会社を連結の範囲に含めたことにより、前連結会計年度比5.4%増の927百万円となりました。

セグメント損益は、売上原価27百万円の増加、営業費用52百万円の増加により50百万円の損失(前連結会計年度は13百万円の損失)となりました。

セグメント資産は、レンタル用LED照明の取得253百万円等により、前連結会計年度に比べ233百万円増加し1,068百万円となりました。

(スポーツ施設提供業)

売上高は、前期並みの442百万円(同1.7%減)となりました。

セグメント損益は、営業費用14百万円の増加により14百万円の利益(前連結会計年度比14.9%減)となりました。

セグメント資産は、前連結会計年度に比べ7百万円減少し1,000百万円となりました。

(不動産業)

売上高は、不動産売買の売上増33百万円により618百万円(同4.7%増)となりました。

セグメント損益は、売上高の増加に伴い236百万円の利益（前連結会計年度比4.0%増）となりました。

セグメント資産は、前連結会計年度に比べ116百万円増加し6,490百万円となりました。

（その他）

売上高は、顧客数の増加により148百万円（同2.4%増）となりました。

セグメント損益は、売上高の増加に伴い22百万円の利益（前連結会計年度比2.4%増）となりました。

セグメント資産は、前連結会計年度に比べ23百万円増加し87百万円となりました

（3）事業活動を継続するとの前提に重要な疑義を生じさせるような事象を解消するための対応策

当社グループにおける継続的な営業損失の発生という状況から早期に脱却するための改善策は、次のとおりであります。

当社グループの営業総利益のうち、投資・金融サービス業への依存度が最も高くなっていることから、当該事業の拡大が最優先課題となっております。新たな事業の柱として金融商品取引業を今後大きく成長させるために、マーケット環境や顧客のニーズに応じた投資セミナーを開催するなどサービスの質的向上を図り、同取引の顧客層を拡大させ、安定的な収益基盤の確保に努めてまいります。

投資・金融サービス業以外の生活・環境事業のうち、保険募集業務では、生損保のクロスセリングの推進や代理店事業と少額短期保険業とのシナジー効果の強化に力を入れ、契約件数の増加に努めてまいります。また、LED照明等の販売及び広告用電設資材卸売業につきましては、2020年の東京オリンピックに向け更なる需要が見込めるなか、新たな顧客の開拓に重点を置いた営業活動を行い、お客様のニーズに応じた提案をすることで顧客基盤の拡充に努めてまいります。

スポーツ施設提供業では、周辺のゴルフ場との差別化を図るため、より質の良いサービスの提供に注力し、売上・来場者の増加に繋げてまいります。

不動産業のうち、不動産賃貸では、当社グループの所有不動産を賃貸することにより安定した収益の確保に努め、不動産売買では、慎重かつ収益性を重視した仕入や販売を行い、リスクを分散しながらバランス良く投資してまいります。

これらの既存事業以外にも、継続的に安定した収益が期待できる事業分野に関しましては新規参入を、不採算事業に関しましてはスピーディーな撤退・再編等を含めて検討してまいります。

これらのことを確実に実行し、営業利益の改善へと繋げてまいります。

このように、上記の既に実施している施策を含む効果的かつ実効可能な対応を行うことにより、継続企業の前提に関して重要な不確実性は認められないものと判断しております。

4 【経営上の重要な契約等】

当連結会計年度において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等は次のとおりであります。

(1) 株式譲渡

当社の連結子会社である株式会社フジトミは、平成29年6月29日開催の取締役会において、少額短期保険業者であるエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社の株式譲渡契約の締結について決議し、同社の株式所有者と株式譲渡契約を締結（平成29年6月30日付締結 7件、平成29年7月6日付締結 2件）し、平成29年7月6日付で株式を取得しました。これに伴い、エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社は当社の連結子会社となりました。

① 目的

エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社を子会社化することで、保険事業の裾野を広げ保険事業全体の安定的な成長を目的としております。少額短期保険業者は、独自のアイデアで販売基盤を発掘し柔軟な商品開発を行うことができるため、既存顧客向けの専用新商品の開発などを通じ、代理店事業とのシナジー効果が見込めます。

② 取得する会社の概要

名称	エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社
事業内容	少額短期保険業
資本金	310,500千円

③ 株式譲渡契約締結日

平成29年6月30日（7件）
平成29年7月6日（2件）

④ 株式取得日

平成29年7月6日

⑤ 取得した株式数、取得価額及び取得後の所有割合

取得した株式数	6,760株
取得価額	10,140千円
取得後の所有割合	99.12%（間接所有割合 99.12%）

(2) 事業譲渡

当社の連結子会社である株式会社フジトミは、平成29年7月25日開催の取締役会において、同社が行う映像コンテンツ配信業務（以下、「VOD事業」という。）に伴う保有資産のすべてを運営委託先に譲渡し、VOD事業を廃止することを決議しました。

① 目的

株式会社フジトミは、平成24年より業務委託の方法でVOD事業を行ってまいりましたが、現状で契約が残っているホテルの採算を個別に再評価した結果、赤字ホテルが大半であることが判明いたしました。今後も業務改善や新規開拓は望めず、売上増加はほとんど見込まれないため、保有資産のすべてを運営委託先に譲渡し、VOD事業を廃止することといたしました。

② 譲渡先の概要

名称	株式会社ニューシーズン
事業内容	映像コンテンツ配信業務
売上高	37,872千円（平成29年3月期）

③ 譲渡する資産の額

有形固定資産（器具及び備品）	173千円
無形固定資産（営業権）	56,190千円

④ 譲渡日及び譲渡金額

譲渡日	平成29年7月28日
譲渡金額	8,000千円

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

該当事項はありません。

2【主要な設備の状況】

1. 当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

(平成30年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額				従業員数 (人)
			建物及び 構 築 物 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
本 社 (東京都中央区)	不動産業	本社	327,058	241,452 (423.20)	72,795	641,306	5 (1)
福利厚生施設 (千葉県夷隅郡他)	会社統括	福利厚生施設	12,981	44,836 (984.14)	694	58,512	— (2)
ゴールデンクロス カントリークラブ (千葉県長生郡)	スポーツ施設 提供業	ゴルフ場	152,626	445,818 (1,001,676.23)	11,062	609,508	—
東京都中央区賃貸 用土地・建物ほか	不動産業	賃貸等不 動産	1,274,904	958,416 (1,685.16)	146	2,233,468	—

(2) 国内子会社

(平成30年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額				従業員数 (人)
			建物及び 構 築 物 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
㈱フジトミ (東京都中央区)	投資・金融 サービス業 生活・環境事業 不動産業	本社 ほか3支店 及び賃貸 等不動産	149,079	371,384 (1,468.45)	11,805	532,269	106 (10)
㈱日本ゴルフ倶楽部 (東京都中央区)	スポーツ施設 提供業	ゴルフ場	144,144	—	39,282	183,427	8 (28)
㈱小林洋行コミュニ ケーションズ (東京都中央区)	その他	本社 ほか1支店	—	—	744	744	8 (2)
㈱三新電業社 (東京都練馬区)	生活・環境事業	本社 ほか1支店	342	—	465,930	466,273	12 (1)
ふくろう少額短期 保険㈱ (東京都千代田区)	生活・環境事業	本社	442	—	479	922	1 (-)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、機械装置、車両、器具及び備品であります。

なお、金額には消費税等は含めておりません。

2. 提出会社の本社中には、㈱フジトミ（連結子会社）に貸与中の土地185,747千円（292.10㎡）、建物239,329千円を含んでおります。

3. ゴルフ場の設備は、すべて㈱日本ゴルフ倶楽部に貸与中であります。

4. 従業員数の（ ）は、臨時雇用者数を外書しております。

2. 当社グループにおける主要な賃借及びリース設備は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

該当事項はありません。

(2) 国内子会社

(平成30年3月31日現在)

会社名	事業所名	セグメントの名称	設備の内容	従業員数 (人)	年間賃借料及び リース料(千円)
(株)フジトミ	本社 ほか3支店	投資・金融サービス業 生活・環境事業 不動産業	本社設備 営業設備	106 (10)	14,476
(株)日本ゴルフ倶楽部	本社 ほか1施設	スポーツ施設提供業	本社設備 ゴルフ場	8 (28)	16,744

(注) 従業員数の()は、臨時雇用者数を外書しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設

該当事項はありません。

(2) 重要な改修

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	27,000,000
計	27,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成30年6月29日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	10,094,644	10,094,644	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数 100株
計	10,094,644	10,094,644	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金残 高(千円)
平成17年3月18日 (注)	—	10,094,644	95,000	2,000,000	△95,000	887,445

(注) 資本準備金の一部95,000千円の資本組入れによるものです。

(5)【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その 他	計	
					個人以外	個人			
株主数 （人）	－	18	16	70	25	26	15, 685	15, 840	－
所有株式数 （単元）	－	11, 496	3, 388	30, 077	4, 053	1, 634	50, 274	100, 922	2, 444
所有株式数 の割合 （％）	－	11. 39	3. 36	29. 80	4. 02	1. 62	49. 81	100	－

(注) 自己株式650,246株は、「個人その他」に6,502単元及び「単元未満株式の状況」に46株を含めて記載しております。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式（自己 株式を除く。）の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
株式会社東京洋行	東京都中央区佃2-1-1-5106	2,788	29.52
株式会社りそな銀行	大阪府大阪市中央区備後町2-2-1	463	4.90
共和証券株式会社	東京都中央区日本橋兜町8-3	312	3.30
細金 英光	東京都中野区	283	3.00
内藤 征吾	東京都中央区	283	3.00
細金 成光	東京都中央区	282	2.99
トウヨウ セキュリティーズ アジア リミテッド アカウ ン ト フリーホープ (常任代理人東洋証券株式会 社)	UNIT 502, 5/FL., HENLEY BUILDING, 5 QUEEN'S ROAD CENTRAL, HONG KONG (東京都中央区八丁堀4-7-1)	230	2.44
細金 千恵子	東京都中央区	170	1.80
細金 玲子	千葉県船橋市	156	1.65
山本 時雄	東京都港区	126	1.34
計	—	5,098	53.98

- (注) 1. 上記のほか、当社所有の自己株式650千株（発行済株式総数に対する所有株式数の割合6.44%）があります。
2. 所有株式数の千株未満は、切り捨てております。
3. 発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合は、小数点第3位以下を切り捨てて表示してあります。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数（株）	議決権の数（個）	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式（自己株式等）	—	—	—
議決権制限株式（その他）	—	—	—
完全議決権株式（自己株式等）	普通株式 650,200	—	—
完全議決権株式（その他）	普通株式 9,442,000	94,420	—
単元未満株式	普通株式 2,444	—	—
発行済株式総数	10,094,644	—	—
総株主の議決権	—	94,420	—

② 【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名又は 名称	所有者の住所	自己名義所有株 式数（株）	他人名義所有株 式数（株）	所有株式数の合 計（株）	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合（%）
株式会社小林洋行	東京都中央区 日本橋蛸殻町 一丁目15番7号	650,200	—	650,200	6.44
計	—	650,200	—	650,200	6.44

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 普通株式

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式数	650,246	—	650,246	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、利益配分につきましては、将来の事業展開と経営体質の強化のために必要な内部留保を確保しつつ、安定した配当を継続して実施していくことを基本方針としております。

当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めておりますが、年1回の期末配当を行うことを基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の配当につきましては、上記方針に基づき1株当たり普通配当2円50銭の期末配当を実施することを決定しました。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は、次のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成30年6月28日 定時株主総会決議	23	2.5

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第67期	第68期	第69期	第70期	第71期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高 (円)	329	378	403	305	340
最低 (円)	241	240	213	232	268

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所（市場第一部）におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高 (円)	292	289	291	340	306	304
最低 (円)	282	270	276	289	278	280

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所（市場第一部）におけるものであります。

5 【役員の状況】

男性 7名 女性 一名 (役員のうち女性の比率-%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役社長 代表取締役		細金 成光	昭和38年 9 月 5 日生	平成 3 年 1 月 当社入社 平成 7 年 11 月 国際法人部統括部長 平成 9 年 6 月 取締役就任 平成 9 年 7 月 国際法人部長兼商品ファンド 部長兼関西支社法人部担当及 び台湾支店担当統括部長 平成 12 年 5 月 国際・情報本部長兼国際部長 兼ファイナンシャル・サービ ス部長兼ファイナンシャル商 品課長兼台湾支店担当統括部 長 平成 12 年 12 月 常務取締役就任 平成 13 年 12 月 国際・情報本部長兼国際部長 兼本社法人第二部長兼ファイ ナンシャル・サービス部長兼 ファイナンシャル商品課長 平成 14 年 6 月 国際・情報本部長 平成 15 年 4 月 金融事業本部長 平成 16 年 2 月 株式会社日本ゴルフ倶楽部監 査役就任 平成 18 年 6 月 専務取締役就任 平成 19 年 7 月 代表取締役専務取締役就任 平成 20 年 6 月 代表取締役社長就任 (現任) 平成 23 年 5 月 株式会社小林洋行コミュニケ ーションズ代表取締役社長就 任 (現任) 平成 27 年 3 月 株式会社三新電業社取締役会 長就任 (現任) 平成 27 年 3 月 看板資材株式会社取締役就任 (現任)	(注) 2	282
常務取締役		大丸 直樹	昭和23年 7 月 25 日生	平成 12 年 4 月 株式会社あさひ銀行 (現株式 会社りそな銀行) より出向 平成 13 年 4 月 執行役員就任 平成 13 年 4 月 総務部長 平成 13 年 10 月 当社入社 平成 14 年 7 月 業務本部長 平成 19 年 6 月 取締役就任 平成 22 年 4 月 総務部長 平成 23 年 3 月 株式会社エコ&エコ取締役就 任 平成 25 年 7 月 常務取締役就任 (現任) 平成 27 年 3 月 経営企画室長 平成 27 年 3 月 株式会社三新電業社代表取締 役社長就任 (現任) 平成 27 年 3 月 看板資材株式会社代表取締役 社長就任 (現任) 平成 27 年 8 月 株式会社共和トラスト取締役 就任 平成 28 年 6 月 株式会社フジミ取締役就任 (現任)	(注) 2	15

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	業務部長	渡辺 宏	昭和35年5月17日生	昭和59年4月 当社入社 平成20年8月 経理部長 平成27年3月 執行役員就任 平成27年3月 業務部長（現任） 平成27年3月 株式会社三新電業社監査役就任（現任） 平成27年6月 株式会社小林洋行コミュニケーションズ監査役就任（現任） 平成27年6月 取締役就任（現任） 平成27年8月 株式会社共和トラスト取締役就任 平成27年10月 株式会社日本ゴルフ倶楽部取締役就任（現任）	(注) 2	5
取締役	経営企画室長	瀧澤 克行	昭和35年10月1日生	昭和57年4月 当社入社 平成15年7月 総務部長代行 平成20年7月 執行役員就任 平成20年7月 C X 事業本部長 平成22年4月 事業部長 平成27年3月 株式会社小林洋行コミュニケーションズ転籍 平成27年3月 同社統括部長（現任） 平成30年6月 同社取締役就任（現任） 平成30年6月 当社取締役就任（現任） 平成30年6月 経営企画室長（現任）	(注) 2	6
取締役 (監査等委員)		霞 信彦	昭和26年7月16日生	昭和59年4月 慶應義塾大学法学部助教授 平成元年4月 慶應義塾大学法学部教授 平成20年6月 当社監査役就任 平成28年6月 当社取締役就任（監査等委員）（現任） 平成29年4月 慶應義塾大学名誉教授（現任）	(注) 3	—
取締役 (監査等委員)		加藤 周二	昭和28年1月10日生	昭和50年4月 通商産業省（現 経済産業省）入省 平成7年6月 国土庁長官官房参事官 平成9年5月 通商産業省大臣官房付（退官） 平成9年12月 社団法人国際経済政策調査会主任エコノミスト 平成11年5月 社団法人国際経済政策調査会理事 平成11年5月 財団法人日本立地センター特別客員研究員 平成13年12月 株式会社フューチャー・エコロジー代表取締役社長就任 平成15年11月 株式会社ビックカメラ取締役就任 平成22年2月 株式会社ビックカメラ取締役就任 C S R O 兼内部統制室長 平成22年11月 株式会社ビックカメラ顧問 平成25年6月 保土谷化学工業株式会社取締役就任（現任） 平成25年6月 当社監査役就任 平成25年7月 株式会社マコト取締役会長就任（現任） 平成28年6月 当社取締役就任（監査等委員）（現任）	(注) 3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (監査等委員)		西田 章	昭和47年4月12日生	平成11年4月 長島・大野法律事務所弁護士 (現 長島・大野・常松法律事務所) 平成14年9月 経済産業省 出向 平成16年7月 日本銀行 出向 平成18年11月 西田法律事務所弁護士 (現任) 平成19年5月 西田法務研究所 (現任) 平成22年6月 株式会社ビジネスプランニング フォーラム社外監査役就任 (現任) 平成29年10月 当社取締役就任 (監査等委員) (現任)	(注) 3	—
計						310

- (注) 1. 霞 信彦氏、加藤周二氏及び西田 章氏は、社外取締役であります。
2. 平成30年6月28日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
3. 平成30年6月28日開催の定時株主総会の終結の時から2年間
4. 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役1名を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
佐野 友昭	昭和24年1月27日生	昭和47年4月 株式会社協和銀行 (現 株式会社りそな銀行) 入行 平成14年6月 株式会社あさひ銀行 (現 株式会社りそな銀行) 取締役兼常務執行役員就任 平成15年8月 共同抵当証券株式会社代表取締役社長就任 平成16年2月 三平建設株式会社社外監査役就任 平成16年6月 株式会社日刊工業新聞社専務取締役就任 平成21年3月 新三平建設株式会社社外監査役就任	—

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① 企業統治の体制

イ. 企業統治の体制の概要

当社は、経営の透明性及び経営環境の変化に迅速かつ的確に対応できる経営体制の確立を重要な経営課題と認識し、企業統治の体制の充実に取り組みながら企業価値を高め、社会に貢献し発展する経営理念を基本的な方針としております。

当社では、経営上の重要事項決定機関である取締役会は、取締役会規程に基づき、定時取締役会を月1回、臨時取締役会を必要に応じて随時開催しております。また、常務会では経営戦略や経営計画の策定及び経営判断の材料提供を検討し、取締役会において意思決定を行っております。

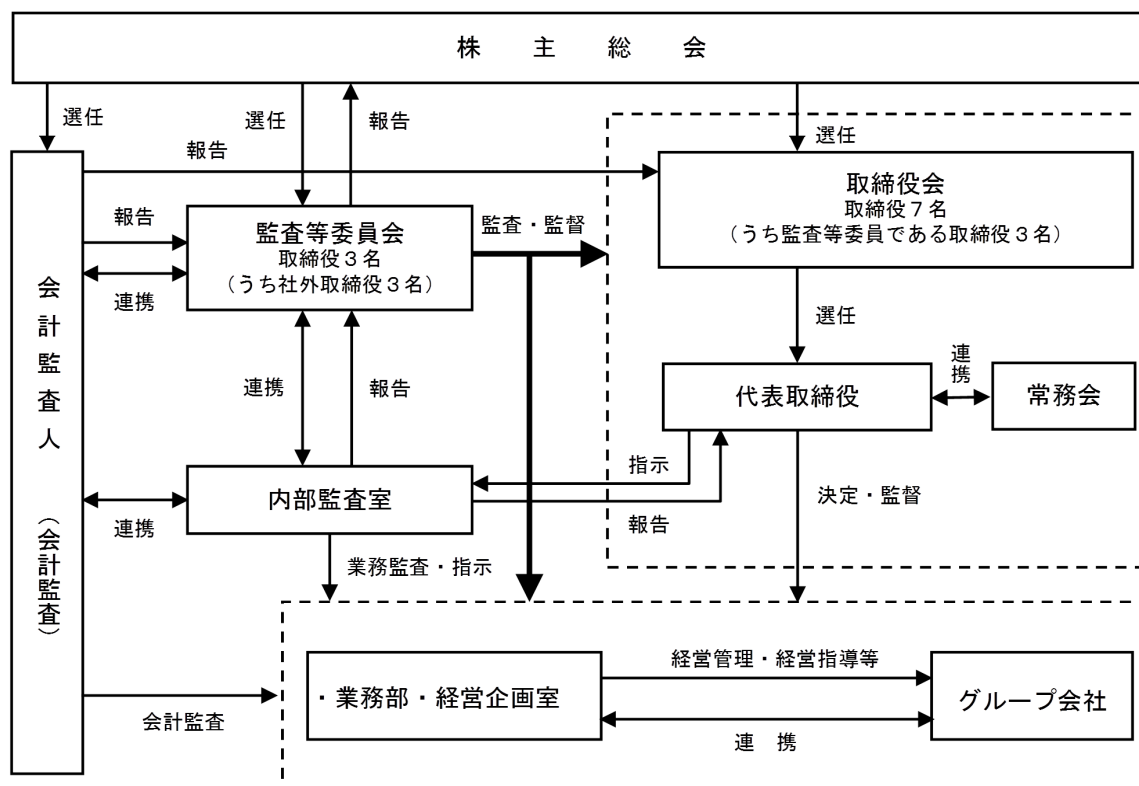
会計監査については、至誠清新監査法人に依頼しており、定期的な監査のほか、会計上の課題については随時確認を行い会計処理の適正性の確保に努めております。

ロ. 企業統治の体制を採用する理由

当社は、監査等委員会設置会社であります。取締役会において議決権を有する監査等委員である取締役を置くことにより、取締役会の監査・監督機能の強化を図っております。また、外部からの客観的、中立の経営監視機能が重要であると考えていることから、監査等委員である取締役は全員社外取締役としております。さらに、各社外取締役は、豊富な経験と専門的な知識を有しており、経営の重要事項の決定及び業務執行に対しての監査・監督等が十分に機能するような体制を整えております。

ハ. 会社の機関・内部統制の関係を示す図表

《 平成30年6月29日現在の当社の経営組織およびコーポレートガバナンス 》



ニ. 内部統制システム及びリスク管理体制の整備の状況

取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制、その他当社の業務並びに当社及び当社の子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制について決議した事項は、次のとおりであります。

1. 取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - (1) 当社及び当社グループの全役職員は、法令並びに社会の構成員として企業人、社会人に求められる倫理や価値に基づき誠実に行動し、公正適正な経営を実現する。
 - (2) 取締役会は、取締役会規程によりその適切な運営が確保されている。取締役会は毎月1回開催することを原則とし、必要に応じて随時開催している。取締役会により取締役間の意思疎通を図り、また、相互に業務執行を監督するとともに、必要に応じて外部の専門家を起用することで、法令・定款違反行為の発生を未然に防止する体制を構築している。

取締役が他の取締役の法令・定款違反行為を発見した場合には、直ちに監査等委員会及び取締役会に報告し、その是正を図ることとしている。
 - (3) 当社は監査等委員会設置会社であり、取締役の職務執行は、監査等委員会の定める監査の方針及び分担に従い、監査対象としている。
2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
 - (1) 取締役の職務の執行に係る情報は文書または電磁的記録により管理、保存する体制としている。
 - (2) 文書の保存期間その他の管理は文書管理規程に、電磁的記録の保存その他管理は情報資産管理規則により行う体制としている。
3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

リスクの管理については、迅速かつ的確に対応すべくリスク管理規程及び事業継続計画を整備し、事業の継続を確保するための体制を構築している。
4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - (1) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するために、原則として月1回取締役会を開催するほか、必要に応じて適宜臨時に開催している。
 - (2) 会社の業務執行に関わる重要事項は、事前に常務会において検討、審議のうえ取締役会において執行決定を行う体制としている。
 - (3) 取締役会の決定に基づく業務執行は、組織規程、業務分掌規程により、責任者及び権限の詳細について定めることとしている。
5. 使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - (1) コンプライアンス体制の基礎として、コンプライアンス規程及び倫理綱領を定めている。
 - (2) 法令及び社会倫理の遵守並びに内部監査のための体制として社長直轄の組織となる内部監査室を置き、次の業務を行う。
 - イ. コンプライアンス体制の整備及び維持のための調査を行う。その結果に基づき、必要に応じて各担当部署にて規則、ガイドラインの策定、研修の実施を行う。
 - ロ. 内部監査部門として業務の執行状況が定められた規程その他の基準に適合しているかどうかを定期的に監査し、結果について社長に報告するとともに執行部門にも還元し、業務執行の精度向上を図る。
 - (3) 取締役は当社における重要な法令違反その他コンプライアンスに関する重要な事実を発見した場合には直ちに監査等委員会及び取締役会に報告し、是正を図る体制としている。
 - (4) 法令違反その他コンプライアンスに関する事実についての社内報告体制として、内部監査室を受領者とする社内通報窓口を設け、内部通報制度に基づいてその運用を行っている。
6. 当社及び当社の子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
 - (1) グループ会社における業務の適正並びに子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び同社の定款に適合することを確保するため、当社の役員が各会社役員等として関与し、各会社の業務執行の適正性を確保する体制としている。また、内部監査室は子会社の内部統制監査を実施して、リスク管理体制の有効性について評価し、その改善を図ることとしている。
 - (2) 子会社の経営意思を尊重しつつ、重要事項は関係会社管理規程に基づき当社に報告を求める体制としている。また、子会社との定期的な情報交換の場を設けて、問題意識の共有化並びに対応についての効率化を確保する体制としている。
7. 監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人に関する事項並びに監査等委員会の職務を補助すべき使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性及び当該使用人に対する実効性の確保に関する事項
 - (1) 監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合には、取締役会は監査等委員会と協議の上、補助すべき使用人を指名する体制としている。監査等委員会の職務を補助すべき取締役は置かないこととしている。
 - (2) 指名された使用人への指揮権は監査等委員会に移譲し、取締役会の指揮命令は受けないものとする体制としている。また、当該使用人が他部署の職務を兼任する場合には、監査等委員会の指示を最優先して従事しなければならない。

8. 取締役及び使用人が監査等委員会に報告をするための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制、その他の監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

(1) 監査等委員は取締役会において取締役から重要な報告を受ける体制としている。また、必要に応じて業務執行に係る重要な事項について、取締役及び使用人に対して説明を求める体制としている。

(2) 「監査等委員会規程」及び「監査等委員会監査基準」に基づく独立性と権限により、監査の実効性を確保する体制としている。

(3) 内部監査室及び会計監査人と密接な連携を保っており、それぞれの監査の結果が報告される体制により、自らの監査成果の達成を図る体制としている。

(4) 当社及び子会社の取締役等及び使用人等は、内部通報制度を利用して、法令違反その他コンプライアンスに関する重要な事実を社内通報窓口に通報できる体制になっており、通報内容は当社の監査等委員会または子会社の監査役に適時報告される。通報または監査等委員会へ報告した者が当該行為を理由に不利な取扱いがされないよう、内部通報規程に基づき、通報者を保護する体制としている。

9. 監査費用等の処理に係る方針

監査等委員より監査費用の前払いまたは償還等の請求があった場合には、その職務の効率性及び適正性に留意し、監査業務に支障がないよう速やかに当該費用または債務を処理する。

10. 財務報告の信頼性を確保するための体制

当社及び当社の子会社からなる企業集団は、財務報告に係る内部統制の基本方針に基づき、正確で信頼性のある財務報告を行う体制としている。

11. 反社会的勢力排除に向けた体制

(1) 当社は、役職員が業務を遂行する上での基本原則である倫理綱領に基づき、市民生活の秩序や安全に脅威を与え、企業の健全な事業活動を妨げる反社会的勢力との取引その他一切の関係を遮断し、反社会的勢力から不当な要求等を受けた場合には、組織全体として毅然とした態度で対応している。

(2) 倫理綱領に則り、反社会的勢力排除の統括管理部门である業務部の主導のもと、研修等の実施を通じて役職員へ周知させ、反社会的勢力との関係断絶に対する意識の向上に努める。

(3) 反社会的勢力排除に向け、平素から警察や弁護士等の外部専門機関との連携を密にして情報交換を行い、迅速に対応できる体制を構築している。

② 内部監査及び監査等委員監査の状況

当社の内部監査及び監査等委員会監査の組織は、社長直轄の内部監査室は1名体制で、社長の承認を受けた監査計画書に基づき、内部監査を定期的実施し、社長に監査の結果を報告し改善等必要な検討がなされ、業務運営の適切な改善または指導を行うこととしております。内部監査の実施状況は認識の共通化を図り監査等委員会及び会計監査人へ報告し、必要に応じてアドバイスを受けることとしております。

監査等委員会監査は、監査基本計画書に基づき実施することとしております。また、取締役会及びその他の会議に出席し、経営の重要事項の決定及び業務執行の監査・監督等に有益な助言等を行うとともに、重要事項については担当役員や担当部署から報告、説明を受けることとしております。その他に四半期毎に会計監査人から監査上の重要事項を中心報告を受けることになっております。

なお、定期的に内部統制部門である内部監査室から内部統制システムの実施状況の報告を受け、監視、検証することとしております。

当社では、財務及び会計に関する相当の知見を有する監査等委員は選任しておりません。

③ 会計監査の状況

当社は会計監査人として、至誠清新監査法人と監査契約を締結し、適宜会計に関する指導を受けており、監査業務は、あらかじめ監査日程を策定し、計画的に監査が行える体制を整備しております。

会計監査業務を執行した公認会計士及び補助者の構成は、次のとおりであります。

至誠清新監査法人 代表社員業務執行社員 公認会計士 吉村 智明

至誠清新監査法人 代表社員業務執行社員 公認会計士 浅井 清澄

監査補助者 5名

なお、監査法人の会計監査については、審査担当社員の審査を受けております。

また、当社と監査法人及び業務執行社員との間には、利害関係はありません。

④ 社外取締役

当社の社外取締役は3名であり、当社と社外取締役との間に特別な利害関係はありません。

当社は、社外取締役が企業統治において、外部からの客観的、中立の経営監視機能が重要であると考えており、経営の重要事項の決定及び業務執行の監督等に有益な助言を期待しております。

また、社外取締役の選任状況につきましては、経営の監視機能を十分に発揮するために、業務執行を行う経営陣からの独立性を有し、また、一般株主と利益相反が生じる恐れがないと判断しております。

なお、社外取締役は、監査等委員である取締役として取締役会において経営の重要事項の決定及び業務執行の監査・監督等に有益な助言等を行っております。また、会計監査人が行った会計監査の結果を監査等委員会において報告を受け、内容の承認を行うとともに、会計監査人及び内部統制部門と定期的に情報交換を行い、業務の運営が適切に行われていることを確認しております。

なお、当社は、東京証券取引所が定める独立性基準に基づいて社外取締役を選任しております。

⑤ 役員報酬等

イ. 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役（監査等委員を除く。） （社外取締役を除く。）	48,000	—	—	—	—	3
取締役（監査等委員） （社外取締役を除く。）	—	—	—	—	—	—
社外役員	18,600	—	—	—	—	4

ロ. 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

ハ. 役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

当社は役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針は定めておりませんが、平成28年6月29日開催の定時株主総会において、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬限度額は年額150百万円以内（ただし、使用人給与は含まない。）、監査等委員である取締役の報酬限度額は年額36百万円以内と決議いただいております。個々の職務と責任に応じて、取締役（監査等委員である取締役を除く。）につきましては取締役会で、監査等委員である取締役につきましては監査等委員の協議で決定しております。

⑥ 株式の保有状況

当社及び連結子会社のうち、投資株式の貸借対照表計上額（投資株式計上額）が最も大きい会社（最大保有会社）である当社の株式の保有状況については以下のとおりです。

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額
20銘柄 1,190,615千円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
前事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数（株）	貸借対照表計上額 （千円）	保有目的
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	81,500	314,590	取引上の関係及び情報収集
リポートトラスト(株)	138,800	272,048	同 上
大和ハウス工業(株)	62,000	198,152	同 上
(株)T&Dホールディングス	20,000	32,320	同 上
(株)日立製作所	53,000	31,932	同 上
東洋証券(株)	115,000	29,555	同 上
(株)りそなホールディングス	45,500	27,204	同 上
(株)銀座山形屋	12,600	22,365	同 上
丸紅(株)	30,000	20,565	同 上
日本管財(株)	11,000	19,756	同 上
(株)セブン銀行	50,000	18,200	同 上
(株)ゆうちょ銀行	13,000	17,953	同 上
(株)ナガホリ	81,000	17,658	同 上
本多通信工業(株)	11,200	16,251	同 上
(株)みずほフィナンシャルグループ	57,000	11,628	同 上
(株)クボタ	5,000	8,355	同 上
長野計器(株)	11,000	7,887	同 上
ヤマハ発動機(株)	2,900	7,774	同 上
日油(株)	5,000	5,910	同 上
デジタル・インフォメーション・テクノロジー(株)	1,000	1,911	同 上

みなし保有株式

該当事項はありません。

当事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数（株）	貸借対照表計上額 （千円）	保有目的
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	81,500	351,020	取引上の関係及び情報収集
リゾートトラスト(株)	138,800	309,940	同 上
大和ハウス工業(株)	62,000	254,200	同 上
(株)T&Dホールディングス	20,000	33,770	同 上
東洋証券(株)	115,000	33,695	同 上
(株)りそなホールディングス	45,500	25,571	同 上
日本管財(株)	11,000	23,144	同 上
本多通信工業(株)	22,400	23,072	同 上
(株)銀座山形屋	12,600	21,823	同 上
(株)ナガホリ	81,000	20,250	同 上
(株)ゆうちょ銀行	13,000	18,564	同 上
(株)セブン銀行	50,000	16,950	同 上
日清食品ホールディングス(株)	1,600	11,808	同 上
(株)みずほフィナンシャルグループ	57,000	10,909	同 上
旭硝子(株)	2,000	8,810	同 上
全国保証(株)	1,800	8,406	同 上
(株)ライフコーポレーション	2,600	7,628	同 上
フジテック(株)	5,000	7,000	同 上
(株)アクシーズ	700	3,276	同 上
第一生命(株)	400	777	同 上

みなし保有株式

該当事項はありません。

- ハ、保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当事業年度における受取配当金、売買損益及び評価損益の合計額
該当事項はありません。

⑦ 取締役の定数

当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）は8名以内、監査等委員である取締役は4名以内とする旨定款に定めております。

⑧ 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、監査等委員である取締役とそれ以外の取締役とを区別して、議決権を行使することができる株主の議決権を3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

⑨ 株主総会の決議事項を取締役会で決議できることとしている事項

(自己の株式の取得)

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を遂行することを目的とするものであります。

(取締役の責任免除)

当社は、取締役が職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるよう、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めております。

(中間配当)

当社は、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。これは、株主の皆様への利益還元をより機動的に行うことを目的とするものであります。

⑩ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

⑪ 責任限定契約の内容の概要

当社と取締役（業務執行取締役等である者を除く。）は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、会社法第425条第1項が定める最低責任限度額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該取締役（業務執行取締役等である者を除く。）が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
提出会社	15,000	—	15,000	—
連結子会社	—	—	—	—
計	15,000	—	15,000	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

会計監査人に対する監査報酬の決定方針は、監査日数、提出会社の規模・業務の特性等の要素を勘案し決定しております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づくとともに、社団法人日本商品取引員協会（現日本商品先物取引協会、以下同じ。）が定めた「商品先物取引業統一経理基準」（平成5年3月3日付、社団法人日本商品取引員協会理事会決定）及び「商品先物取引業における証券取引法に基づく開示の内容について」（平成5年7月14日付、社団法人日本商品取引員協会理事会決定）に準拠して作成しております。また、有価証券関連業固有の事項のうち主なものについては、「金融商品取引業に関する内閣府令」（平成19年内閣府令第52号）および「有価証券関連業経理の統一に関する規則」（昭和49年11月14日付日本証券業協会自主規制規則）に準拠して作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の財務諸表について、至誠清新監査法人により監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、または会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。また、公益財団法人財務会計基準機構の行う有価証券報告書並びに四半期報告書の作成要領等に関する研修に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※1 3,281,984	※1 3,067,645
委託者未収金	64,700	44,185
売掛金	154,794	156,641
有価証券	—	26,931
商品及び製品	※6 366,842	318,609
原材料及び貯蔵品	3,973	6,900
保管有価証券	※1 320,979	※1 388,178
差入保証金	2,533,910	3,409,087
委託者先物取引差金	553,680	541,578
預託金	※1 35,000	※1 35,000
繰延税金資産	1,697	1,543
その他	※2 188,062	※2 130,731
貸倒引当金	△11,031	△2,184
流動資産合計	7,494,594	8,124,846
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	3,146,498	3,158,338
減価償却累計額	△986,601	△1,096,758
建物及び構築物（純額）	※1,※6 2,159,897	※1 2,061,580
土地	※1,※6 2,061,909	※1 2,061,909
その他	941,034	1,117,760
減価償却累計額	△493,008	△514,818
その他（純額）	448,025	602,942
有形固定資産合計	4,669,831	4,726,432
無形固定資産		
その他	135,866	104,004
無形固定資産合計	135,866	104,004
投資その他の資産		
投資有価証券	※1,※3 1,413,127	※1,※3 1,462,216
繰延税金資産	469	614
その他	638,595	644,235
貸倒引当金	△144,303	△132,935
投資その他の資産合計	1,907,888	1,974,131
固定資産合計	6,713,586	6,804,568
資産合計	14,208,181	14,929,414

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	76,574	69,043
短期借入金	100,000	100,000
1年内返済予定の長期借入金	※1 20,400	※1 20,400
未払法人税等	16,088	27,727
預り証拠金	2,540,222	2,026,025
預り証拠金代用有価証券	320,979	388,178
受入保証金	495,041	1,821,682
その他	※2 262,596	※2 283,968
流動負債合計	3,831,902	4,737,024
固定負債		
長期借入金	※1 121,800	※1 101,400
繰延税金負債	69,444	116,691
退職給付に係る負債	178,252	207,763
長期末払金	52,251	47,404
その他	155,493	141,193
固定負債合計	577,241	614,453
特別法上の準備金		
商品取引責任準備金	※4 30,825	※4 28,513
金融商品取引責任準備金	※4 45	※4 506
特別法上の準備金合計	30,870	29,020
負債合計	4,440,014	5,380,497
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,000,000	2,000,000
資本剰余金	888,445	888,475
利益剰余金	5,936,896	5,734,398
自己株式	△454,376	△454,376
株主資本合計	8,370,965	8,168,498
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	102,591	228,276
繰延ヘッジ損益	△2,241	△1,268
その他の包括利益累計額合計	100,349	227,007
非支配株主持分	1,296,850	1,153,411
純資産合計	9,768,166	9,548,917
負債純資産合計	14,208,181	14,929,414

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業収益		
受取手数料	1,354,086	1,344,109
売買損益	△48,910	△53,065
売上高	1,909,593	1,903,737
その他の営業収益	13,028	60,682
営業収益合計	3,227,797	3,255,464
売上原価	1,234,171	1,273,430
営業総利益	1,993,626	1,982,033
営業費用		
取引所関係費	41,459	63,133
人件費	※1 1,411,819	※1 1,415,254
調査費	55,026	55,970
通信費	31,742	31,981
広告宣伝費	56,332	83,759
車両費	5,434	6,068
地代家賃	56,297	58,554
電算機費	87,082	98,707
減価償却費	67,317	72,627
貸倒引当金繰入額	—	1,444
その他	392,080	438,962
営業費用合計	2,204,593	2,326,465
営業損失(△)	△210,967	△344,431
営業外収益		
受取利息	14,733	7,783
受取配当金	46,506	36,553
貸倒引当金戻入額	1,194	10,813
商品取引事故引当金戻入額	12,653	—
その他	18,083	20,465
営業外収益合計	93,171	75,616
営業外費用		
支払利息	2,750	2,525
貸倒損失	320	240
持分法による投資損失	※4 229,083	—
その他	3,194	1,190
営業外費用合計	235,347	3,955
経常損失(△)	△353,142	△272,771

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
特別利益		
固定資産売却益	※2 233	※2 234
商品取引責任準備金戻入額	3	2,311
投資有価証券売却益	13,092	24,307
負ののれん発生益	—	16,989
貸倒引当金戻入額	112,657	10,374
その他	370	475
特別利益合計	126,358	54,693
特別損失		
金融商品取引責任準備金繰入れ	43	460
固定資産除売却損	※3 1,950	※3 48,551
投資有価証券売却損	1,223	6,733
システム移行費用	—	29,520
その他	—	6,237
特別損失合計	3,217	91,503
税金等調整前当期純損失 (△)	△230,002	△309,581
法人税、住民税及び事業税	17,169	16,742
法人税等調整額	△569	8
法人税等合計	16,599	16,750
当期純損失 (△)	△246,601	△326,331
非支配株主に帰属する当期純損失 (△)	△118,143	△147,445
親会社株主に帰属する当期純損失 (△)	△128,458	△178,886

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純損失(△)	△246,601	△326,331
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	24,577	141,790
繰延ヘッジ損益	1,419	973
その他の包括利益合計	※1,※2 25,997	※1,※2 142,763
包括利益	△220,604	△183,568
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△116,457	△52,228
非支配株主に係る包括利益	△104,146	△131,339

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	2,000,000	888,445	6,088,965	△454,376	8,523,035
当期変動額					
剰余金の配当			△23,610		△23,610
親会社株主に帰属する当期純損失（△）			△128,458		△128,458
連結子会社の増資による持分の増減					
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	△152,069	－	△152,069
当期末残高	2,000,000	888,445	5,936,896	△454,376	8,370,965

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	92,010	△3,661	88,348	1,413,283	10,024,667
当期変動額					
剰余金の配当					△23,610
親会社株主に帰属する当期純損失（△）					△128,458
連結子会社の増資による持分の増減					
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	10,581	1,419	12,001	△116,432	△104,431
当期変動額合計	10,581	1,419	12,001	△116,432	△256,501
当期末残高	102,591	△2,241	100,349	1,296,850	9,768,166

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	2,000,000	888,445	5,936,896	△454,376	8,370,965
当期変動額					
剰余金の配当			△23,610		△23,610
親会社株主に帰属する当期純損失（△）			△178,886		△178,886
連結子会社の増資による持分の増減		30			30
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	30	△202,497	－	△202,467
当期末残高	2,000,000	888,475	5,734,398	△454,376	8,168,498

	その他の包括利益累計額			非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	102,591	△2,241	100,349	1,296,850	9,768,166
当期変動額					
剰余金の配当					△23,610
親会社株主に帰属する当期純損失（△）					△178,886
連結子会社の増資による持分の増減					30
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	125,685	973	126,658	△143,439	△16,781
当期変動額合計	125,685	973	126,658	△143,439	△219,249
当期末残高	228,276	△1,268	227,007	1,153,411	9,548,917

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純損失 (△)	△230,002	△309,581
減価償却費	67,317	72,627
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△116,527	△20,215
持分法による投資損益 (△は益)	229,083	—
商品取引事故引当金の増減額 (△は減少)	△16,653	—
商品取引責任準備金の増減額 (△は減少)	△3	△2,311
商品取引責任準備預金の増減額 (△は増加)	△916	3
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	20,969	29,510
受取利息及び受取配当金	△61,240	△44,343
支払利息	2,750	2,558
固定資産除売却損益 (△は益)	1,717	48,317
システム移行費用	—	29,520
投資有価証券売却損益 (△は益)	△11,869	△17,574
たな卸資産の増減額 (△は増加)	100,507	45,935
負ののれん発生益	—	△16,989
委託者未収金の増減額 (△は増加)	9,966	24,136
差入保証金の増減額 (△は増加)	△702,666	△875,176
委託者先物取引差金の増減額 (△は増加)	162,248	12,102
預託金の増減額 (△は増加)	△10,000	—
預り証拠金の増減額 (△は減少)	190,880	△514,196
受入保証金の増減額 (△は減少)	358,126	1,326,640
その他	229,789	194,571
小計	223,475	△14,464
利息及び配当金の受取額	61,240	44,343
利息の支払額	△2,750	△2,558
法人税等の支払額	△72,665	△24,771
法人税等の還付額	11,985	29,487
営業活動によるキャッシュ・フロー	221,286	32,036

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△1,307,500	△1,277,500
定期預金の払戻による収入	1,307,500	1,297,500
有価証券の取得による支出	△130,000	△120,000
有価証券の償還による収入	262,247	90,000
有形固定資産の取得による支出	△378,055	△286,372
有形固定資産の売却による収入	19,634	277
無形固定資産の取得による支出	△37,714	△53,012
投資有価証券の取得による支出	△239,035	△343,892
投資有価証券の売却による収入	153,606	504,484
投資有価証券の償還による収入	157,481	—
貸付による支出	△2,800	△2,500
貸付の回収による収入	5,898	3,769
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	—	※2 7,942
敷金及び保証金の差入による支出	△65,089	△92,558
敷金及び保証金の回収による収入	41,157	100,667
その他	△6,324	1,173
投資活動によるキャッシュ・フロー	△218,991	△170,020
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	50,000	—
長期借入金の返済による支出	△20,400	△20,400
配当金の支払額	△23,610	△23,610
非支配株主への配当金の支払額	△12,285	△12,310
リース債務の返済による支出	—	△73
財務活動によるキャッシュ・フロー	△6,296	△56,394
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△4,001	△194,378
現金及び現金同等物の期首残高	1,947,654	1,943,653
現金及び現金同等物の期末残高	※1 1,943,653	※1 1,749,274

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 6社

主要な連結子会社の名称

(株)フジトミ

(株)日本ゴルフ倶楽部

(株)小林洋行コミュニケーションズ

(株)三新電業社

看板資材(株)

ふくろう少額短期保険(株)

上記のうち、ふくろう少額短期保険(株)については、当連結会計年度において当社連結子会社(株)フジトミが新たにふくろう少額短期保険(株)株式を取得したため、連結の範囲に含めております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数 1社

BLUE EARTH(株)

(2) 投資差額の償却に関する事項

持分法適用会社との間に生じた投資差額（のれん相当額）は、その効果の及ぶ合理的な期間で均等償却を行っております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

すべての連結子会社の事業年度の末日は連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法、連結子会社(株)フジトミは総平均法による原価法

保管有価証券

商品先物取引の委託証拠金の代用

商品先物取引法施行規則第39条の規定により商品取引所が定めた充用価格によっており、主な有価証券の充用価格は次のとおりであります。

利付国債証券（7%未満） 額面金額の80%

社債（上場銘柄） 額面金額の65%

株券（一部上場銘柄） 時価の70%相当額

倉荷証券 時価の70%相当額

② デリバティブ 時価法

③ たな卸資産

商 品 移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

原材料及び貯蔵品 最終仕入原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

トレーディング商品 時価法

販売用不動産 個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法（ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（附属設備を除く）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 3～68年

機械装置 5～17年

器具及び備品 3～15年

② 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

③ リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

② 商品取引責任準備金

商品先物取引事故による損失に備えるため、商品先物取引法第221条の規定に基づき、同法施行規則第111条に定める額を計上しております。

③ 金融商品取引責任準備金

金融商品取引事故による損失に備えるため、金融商品取引法第46条の5の規定に基づき計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

当社及び連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。また、金利スワップについて特例処理の条件を満たしている場合には特例処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段 金利スワップ

ヘッジ対象 借入金

③ ヘッジ方針

金利リスクの低減並びに金融収支改善のため、対象債務の範囲内でヘッジを行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、その変動額等を基礎にして有効性を評価しております。

ただし、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、その効果の及ぶ合理的な期間で均等償却を行っております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

- ① 消費税等の会計処理 税抜方式を採用しております。
- ② 連結納税制度の適用 連結納税制度を適用しております

(会計方針の変更)

該当事項はありません。

(未適用の会計基準等)

- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 平成30年2月16日改正 企業会計基準委員会)
- ・「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成30年2月16日最終改正 企業会計基準委員会)

(1) 概要

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等は、日本公認会計士協会における税効果会計に関する実務指針を企業会計基準委員会に移管するに際して、基本的にその内容を踏襲した上で、必要と考えられる以下の見直しが行われたものであります。

(会計処理の見直しを行った主な取扱い)

- ・個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱い
- ・(分類1)に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱い

(2) 適用予定日

平成31年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会 (IASB) 及び米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

該当事項はありません。

(追加情報)

該当事項はありません。

(連結貸借対照表関係)

※1 担保に供している資産の内訳、対応する債務の内訳及び担保債務は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
イ. 担保資産 (担保資産の内訳)		
現金及び預金	380,000千円	380,000千円
預託金	5,000	5,000
建物及び構築物	380,185	363,383
土地	208,043	208,043
投資有価証券	11,925	11,925
計	985,153	968,351
(対応する債務の内訳)		
商品先物取引法施行規則第98条第1項第4号の規定に基づく委託者保護基金による代位弁済委託契約額	50,000千円	50,000千円
ロ. 担保付債務		
1年内返済予定の長期借入金	20,400千円	20,400千円
長期借入金	121,800	101,400
計	142,200	121,800
ハ. 預託資産 商品先物取引法等関係法令により預託すべき取引証拠金の代用として㈱日本商品清算機構に預託している資産は、次のとおりであります。		
保管有価証券	319,439千円	386,918千円
投資有価証券	90,300	101,625
計	409,739	488,543
ニ. 分離保管資産 商品先物取引法第210条に基づき日本商品委託者保護基金に分離保管しなければならない保全対象財産の金額		
	－千円	－千円
同法施行規則第98条に基づく、委託者資産保全措置額	50,000千円	50,000千円
ホ. 分別保管資産 金融商品取引法第43条の2に基づき日証金信託銀行に分別保管している預託金（顧客分別金信託）		
	10,000千円	10,000千円

※2 消費税等の会計処理

未収消費税等は、流動資産の「その他」に、未払消費税等は、流動負債の「その他」にそれぞれ含めて表示しております。

※3 関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券（株式）	0千円	0千円

※4 特別法上の準備金

特別法上の準備金の計上を規定した法令の条項は、次のとおりであります。

商品取引責任準備金 商品先物取引法第221条
金融商品取引責任準備金 金融商品取引法第46条の5

- 5 当社、連結子会社㈱フジトミ及び㈱三新電業社においては、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行2行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく連結会計年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
当座貸越極度額	480,000千円	480,000千円
借入実行残高	100,000	100,000
差引額	380,000	380,000

※6 資産保有目的の変更

前連結会計年度（平成29年3月31日）

従来、固定資産に計上されていた「建物及び構築物」、「土地」308,161千円を保有目的の変更により、流動資産の「商品及び製品」（販売用不動産）に振替えております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

該当事項はありません。

（連結損益計算書関係）

※1 人件費に含まれている引当金の繰入額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月31日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月31日 至 平成30年3月31日)
退職給付費用	26,883千円	30,611千円

※2 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月31日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月31日 至 平成30年3月31日)
土地	24千円	－千円
車両	209	234
計	233	234

※3 固定資産除売却損の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月31日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月31日 至 平成30年3月31日)
(固定資産除売却損)		
建物及び構築物	512千円	－千円
車両	223	0
機械装置	－	5
器具及び備品	1,195	181
その他	14	－
計	1,946	187
(固定資産売却損)		
車両	4千円	－千円
器具及び備品	－	173
無形固定資産その他（ライセンス料）	－	48,190
計	4	48,363

※4 持分法による投資損失

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

持分法適用会社のBLUE EARTH㈱に係るのれん相当額について、事業環境及び業績等を勘案して回収可能価額を評価した結果、当連結会計年度末におけるのれんの未償却残高212,882千円の全額を営業外費用の「持分法による投資損失」に計上しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

(連結包括利益計算書関係)

※ 1 その他の包括利益に係る組替調整額

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	22,903千円	190,888千円
組替調整額	△948	△1,843
計	21,955	189,044
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	1,419	973
組替調整額	—	—
計	1,419	973
税効果調整前合計	23,375	190,017
税効果額	2,622	△47,254
その他の包括利益合計	25,997	142,763

※ 2 その他の包括利益に係る税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
その他有価証券評価差額金：		
税効果調整前	21,955千円	189,044千円
税効果額	2,622	△47,254
税効果調整後	24,577	141,790
繰延ヘッジ損益：		
税効果調整前	1,419	973
税効果額	—	—
税効果調整後	1,419	973
その他の包括利益合計		
税効果調整前	23,375	190,017
税効果額	2,622	△47,254
税効果調整後	25,997	142,763

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数 (千株)	当連結会計年度 増加株式数 (千株)	当連結会計年度 減少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)
発行済株式				
普通株式	10,094	—	—	10,094
合計	10,094	—	—	10,094
自己株式				
普通株式	650	—	—	650
合計	650	—	—	650

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当 額(円)	基準日	効力発生日
平成28年6月29日 定時株主総会	普通株式	23,610	2.5	平成28年3月31日	平成28年6月30日

(2) 基準日が当期に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり配 当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	23,610	利益剰余金	2.5	平成29年3月31日	平成29年6月30日

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数 (千株)	当連結会計年度 増加株式数 (千株)	当連結会計年度 減少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)
発行済株式				
普通株式	10,094	—	—	10,094
合計	10,094	—	—	10,094
自己株式				
普通株式	650	—	—	650
合計	650	—	—	650

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当 額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	23,610	2.5	平成29年3月31日	平成29年6月30日

(2) 基準日が当期に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌期となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり配 当額 (円)	基準日	効力発生日
平成30年6月28日 定時株主総会	普通株式	23,610	利益剰余金	2.5	平成30年3月31日	平成30年6月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金勘定	3,281,984千円	3,067,645千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△1,307,500	△1,287,500
商品取引責任準備預金	△30,829	△30,825
金融商品取引責任準備預金	△2	△45
現金及び現金同等物	1,943,653	1,749,274

※2 当連結会計年度に株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

株式の取得により新たにエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社（平成30年3月1日付でふくろう少額短期保険株式会社に商号を変更）を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びにエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社株式の取得価額とエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社取得のための支出（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	26,034千円
固定資産	14,443
流動負債	△12,753
固定負債	△353
非支配株主持分	△240
負ののれん発生益	△16,989
株式の取得価額	10,140
現金及び現金同等物	△18,082
差引：取得による収入	7,942

(リース取引関係)

(借主側)

ファイナンス・リース取引

該当事項はありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループの主たる事業は、商品先物取引の受託業務、自己売買業務及び金融商品取引の受託業務、自己売買業務を行う投資・金融サービス業であります。この事業は全て自己資金でまかなっております。資金運用については短期の預金及び満期保有目的債券によるほか、自己の計算に基づき会社の利益確保のため自己売買業務を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である委託者未収金及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、保管有価証券及び預り証拠金代用有価証券は、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、顧客より預託された取引証拠金であり、商品先物取引法施行規則に基づく充用価格によって預託を受けております。

預り証拠金は当社グループの顧客が行っている商品先物取引に係る取引証拠金であります。また、受入保証金は、当社グループの顧客より預託された金融商品に係る保証金であります。

差入保証金は、主に当社グループの顧客が行っている商品先物取引に係る取引証拠金及び、金融商品取引に係る受入保証金であり、商品先物取引に基づくクリアリング・ハウス及び東京金融取引所へ預託しております。また、委託者先物取引差金は当社グループの顧客が行っている商品先物取引に係る値洗い額であり、預り証拠金により担保されているため、リスクは非常に低いものであります。

有価証券及び投資有価証券は、主に満期保有目的の債券及び業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

長期借入金は、運転資金を目的とした調達であり、金利は固定されておりリスクは存在しません。

また、一部の子会では商品先物取引自己売買及び金融商品取引自己売買をトレーディングポジションとして保有しております。当該金融商品は、金利変動リスク、為替変動リスク、価格変動リスク及び信用リスク等に晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

一部の連結子会社の営業債権につきましては、取引先毎の残高及び期日を親会社が把握することにより、回収リスクの軽減を図っております。また、自己売買取引の差入保証金については、全て稟議決裁を経て取締役会規程に則り与信管理を行っております。

満期保有目的の債券は、資産運用規程に従っております。

自己売買取引の利用にあたっては、国内の取引所取引及び格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

② 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社及び一部の連結子会社は、有価証券及び投資有価証券について、定期的に時価や発行体の財務状況等を把握し、また、満期保有目的の債券以外のものについては、市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

連結子会社の自己売買取引の執行・管理については、取引権限及び取引限度額等を定めた管理規程に従い、担当部署が決裁担当者の承認を得て行っております。月次の取引実績は、取締役会に報告しております。

③ 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払を実行できなくなるリスク）の管理

当社グループでは、各社が毎日資金繰計画を作成・更新する方法により流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。また、注記事項「デリバティブ取引関係」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。なお、オプション取引の評価損益はオプション料とその時価との比較で計算されますが、オプション取引の契約額は全てのオプションの権利行使をした場合及び被権利行使を受けた場合において原市場での売買の総約定代金であります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	3,281,984	3,281,984	—
(2) 売掛金	154,794	154,794	—
(3) 保管有価証券	320,979	462,587	141,608
(4) 差入保証金	2,533,910	2,533,910	—
(5) 委託者先物取引差金	553,680	553,680	—
(6) 投資有価証券	1,399,252	1,399,252	—
資産計	8,244,602	8,386,210	141,608
(1) 買掛金	76,574	76,574	—
(2) 短期借入金	100,000	100,000	—
(3) 預り証拠金	2,540,222	2,540,222	—
(4) 預り証拠金代用有価証券	320,979	462,587	141,608
(5) 受入保証金	495,041	495,041	—
(6) 長期借入金（1年内返済予定 長期借入金を含む）	142,200	142,200	—
負債計	3,675,027	3,816,635	141,608
デリバティブ取引			
(1) ヘッジ会計が適用されていないもの	(契約額 売建) 76,501	74,530	1,971
	(契約額 買建) 823,237	795,133	△28,104
(2) ヘッジ会計が適用されているもの (※1)	△2,241	△2,241	—

(※1) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については△で示しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	3,067,645	3,067,645	—
(2) 売掛金	156,641	156,641	—
(3) 保管有価証券	388,178	586,903	198,725
(4) 差入保証金	3,409,087	3,409,087	—
(5) 委託者先物取引差金	541,578	541,578	—
(6) 投資有価証券	1,423,341	1,423,341	—
資産計	8,986,471	9,185,196	198,725
(1) 買掛金	69,043	69,043	—
(2) 短期借入金	100,000	100,000	—
(3) 預り証拠金	2,026,025	2,026,025	—
(4) 預り証拠金代用有価証券	388,178	586,903	198,725
(5) 受入保証金	1,821,682	1,821,682	—
(6) 長期借入金（1年内返済予定 長期借入金を含む）	121,800	121,800	—
負債計	4,526,728	4,725,453	198,725
デリバティブ取引			
(1) ヘッジ会計が適用されていないもの	(契約額 売建) —	—	—
	(契約額 買建) —	—	—
(2) ヘッジ会計が適用されているもの (※1)	△1,268	△1,268	—

(※1) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については△で示しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 売掛金、(5) 委託者先物取引差金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(6) 投資有価証券

株式は取引所の価格によっており、債券及び投資信託は取引所の価格または金融機関から提示された価格によっております。

(3) 保管有価証券

取引に基づくものであり、時価について、株式及び倉荷証券は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格または金融機関から提示された価格によっております。また、投資信託については、公表されている基準価格によっております。

(4) 差入保証金

取引に基づくものであり、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

負債

(1) 買掛金、(2) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 預り証拠金、(5) 受入保証金

取引に基づくものであり、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 預り証拠金代用有価証券

取引に基づく有価証券であり、時価について、株式及び倉荷証券は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格または金融機関から提示された価格によっております。また、投資信託については、公表されている基準価格によっております。

(6) 長期借入金

長期借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当社グループの信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額によっております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該長期借入金の元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算出する方法によっております。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照ください。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
非上場株式等 ※1	13,875	38,875
長期未払金 ※2	52,251	47,404

※1 これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「資産(6)投資有価証券」には含めておりません。

※2 役員退職慰労金等であり、当該役員等の退職時期が特定されていないため時価の算定が困難と認められることから除外しております。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	3,281,984	—	—	—
売掛金	154,794	—	—	—
差入保証金	2,533,910	—	—	—
委託者先物取引差金	553,680	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
(3) その他	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券（社債）	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	—
合計	6,524,370	—	—	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	3,067,645	—	—	—
売掛金	156,641	—	—	—
差入保証金	3,409,087	—	—	—
委託者先物取引差金	541,578	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
（1）国債・地方債	—	—	—	—
（2）社債	—	—	—	—
（3）その他	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期 があるもの				
（1）債券（社債）	—	—	—	—
（2）その他	26,931	—	—	—
合計	7,201,883	—	—	—

4. 長期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	20,400	20,400	20,400	20,400	20,400	40,200

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	20,400	20,400	20,400	20,400	20,400	19,800

(有価証券関係)

1. 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

2. その他有価証券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価(千円)	差額(千円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	937,787	678,048	259,738
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	937,787	678,048	259,738
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	461,465	591,159	△129,694
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	461,465	591,159	△129,694
合計		1,399,252	1,269,208	130,044

(注) 非上場株式等(連結貸借対照表計上額13,875千円)及び関連会社株式(連結貸借対照表計上額0千円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価(千円)	差額(千円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,095,306	692,023	403,282
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,095,306	692,023	403,282
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	288,444	363,687	△75,242
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	26,931	30,000	△3,069
	(3) その他	39,590	45,479	△5,889
	小計	354,965	439,166	△84,200
合計		1,450,272	1,131,190	319,081

(注) 非上場株式等(連結貸借対照表計上額38,875千円)及び関連会社株式(連結貸借対照表計上額0千円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表「その他有価証券」には含めておりません。

3. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

種類	売却額（千円）	売却益の合計額（千円）	売却損の合計額（千円）
(1) 株式	153,606	13,092	△1,223
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	153,606	13,092	△1,223

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

種類	売却額（千円）	売却益の合計額（千円）	売却損の合計額（千円）
(1) 株式	504,484	24,307	△6,733
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	504,484	24,307	△6,733

4. 減損処理を行った有価証券

該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1)商品関連

前連結会計年度（平成29年3月31日）

区 分	取引の種類	契約金額 (千円)	契約額等のうち 1年超 (千円)	時価 (千円)	評価損益 (千円)
市場取引	現物先物取引				
	貴金属市場				
	売 建	—	—	—	—
	買 建	167,645	—	167,810	165
	ゴム市場				
	売 建	76,501	—	74,530	1,971
	買 建	—	—	—	—
	石油市場				
	売 建	—	—	—	—
	買 建	303,837	—	300,898	△2,939
	現金決済取引				
	石油市場				
	売 建	—	—	—	—
	買 建	351,755	—	326,425	△25,330
合計		—	—	—	△26,132

(注) 1. 時価の算定方法 市場取引につきましては東京商品取引所における最終価格によっております。

2. デリバティブ取引の評価損益は「金融商品に関する会計基準」を適用し、連結損益計算書の売買損益に含めて計上しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

該当事項はありません。

(2)株価指数

該当事項はありません。

(3)通貨関連

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

金利関連

前連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	ヘッジ対象	契約金額 (千円)	契約額等のうち 1年超 (千円)	時価 (千円)
原則的処理方法	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	142,200	121,800	△2,241

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	ヘッジ対象	契約金額 (千円)	契約額等のうち 1年超 (千円)	時価 (千円)
原則的処理方法	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	121,800	101,400	△1,268

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しております

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社株式会社フジトミ及び株式会社小林洋行コミュニケーションズは、退職金制度として、確定拠出年金制度及び退職一時金制度を、また、連結子会社株式会社三新電業社は確定拠出金制度を、株式会社日本ゴルフ倶楽部は退職一時金制度を設けております。

2. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	157,283千円	178,252千円
退職給付費用	26,883	30,611
退職給付の支払額	△5,913	△1,100
退職給付に係る負債の期末残高	178,252	207,763

(2) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度26,883千円 当連結会計年度30,611千円

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度10,144千円、当連結会計年度10,999千円であります。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	54,580 千円	63,617 千円
貸倒引当金	51,156	44,871
長期未払金	14,511	14,511
商品取引責任準備金	9,438	8,730
投資有価証券	36,506	25,870
会員権	4,846	4,908
未払事業税・未払事業所税	1,839	1,908
未払費用	12,583	11,962
税務上の繰越欠損金	2,966,810	2,508,675
その他	36,909	30,298
繰延税金資産小計	3,189,182	2,715,356
評価性引当額	△3,187,015	△2,713,198
繰延税金資産合計	2,166	2,158
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△69,444	△116,691
繰延税金負債合計	△69,444	△116,691
繰延税金負債の純額	△67,277	△114,532
繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。		
流動資産－繰延税金資産	1,697 千円	1,543 千円
固定資産－繰延税金資産	469	614
固定負債－繰延税金負債	69,444	116,691

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

税金等調整前当期純損失を計上しているため記載しておりません。

(企業結合等関係)

取得による企業結合

1. 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社
事業の内容 少額短期保険業

(2) 企業結合を行った主な理由

少額短期保険業者は、独自のアイデアで販売基盤を発掘し柔軟な商品開発を行うことができるため、既存顧客向けの専用新商品の開発などを通じ、代理店事業とのシナジー効果が見込めるためであります。

(3) 企業結合日

平成29年7月6日
平成29年9月30日(みなし取得日)

(4) 企業結合の法的形式

株式取得

(5) 結合後企業の名称

エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社
(平成30年3月1日付でふくろう少額短期保険株式会社に商号変更)

(6) 取得した議決権比率

99.12%
なお、平成30年3月29日付の追加取得により議決権比率を99.81%としております。

(7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

エイチ・エスライフ少額短期保険株式会社を子会社化することで、保険事業の裾野を広げ保険事業全体の安定的な成長を図るためであります。

2. 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

平成29年10月1日から平成30年3月31日まで

3. 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金及び預金	10,140千円
取得原価		10,140

4. 負ののれん発生益の金額及び発生原因

(1) 負ののれん発生益の金額

16,989千円

(2) 発生原因

被取得企業の資産及び負債を企業結合日の時価で算定した金額が、取得原価を上回ることにより発生したものであります。

5. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	26,034千円
固定資産	14,443
資産合計	40,477
流動負債	△12,753
固定負債	△353
負債合計	△13,106

6. 企業結合が連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の連結損益計算書に及ぼす影響額の概算額及びその算定方法

保険収支	30,818千円
営業損失(△)	△20,267
経常損失(△)	△20,297
税引前当期純損失(△)	△20,297
当期純損失(△)	△20,630

(概算額の算定方法)

企業結合が当連結会計年度開始の日に完了したと仮定して算定された売上高及び損益情報を影響の概算額としております。なお、当該注記は監査証明は受けておりません。

共通支配下の取引等
子会社株式の追加取得

1. 取引の概要

(1) 結合当事企業の名称及びその事業の内容

結合当事企業の名称 ふくろう少額短期保険株式会社
事業の内容 少額短期保険業

(2) 企業結合日

平成30年3月29日

(3) 企業結合の法的形式

結合当事企業が実施する第三者割当増資の引受

(4) 結合後企業の名称

変更ありません。

(5) その他取引の概要に関する事項

同社の財務体質の改善を目的として、第三者割当増資の引受を行うものであります。この結果、連結子会社株式会社フジトミの保有する議決権比率は99.81%となっております。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

3. 子会社株式を追加取得した場合に掲げる事項

取得の対価	現金	39,000千円
取得原価		39,000

4. 子会社株式の追加取得に係る当社の持分変動に関する事項

(1) 資本剰余金の主な変動要因

子会社株式の追加取得

(2) 子会社株式の追加取得によって増加した資本剰余金の金額
30千円

(資産除去債務関係)

前連結会計年度末（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

資産除去債務については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度末（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

資産除去債務については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

当社及び一部の連結子会社では、東京都その他の地域において、賃貸用のマンション、オフィスビル（土地を含む）等を有しております。前連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は141,451千円（賃貸収益は売上高に、主な賃貸費用は売上原価に計上）であります。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は140,856千円（賃貸収益は売上高に、主な賃貸費用は売上原価に計上）であります。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりであります。

（単位：千円）

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
連結貸借対照表計上額		
期首残高	3,099,665	2,786,168
期中増減額	△313,496	△68,870
期末残高	2,786,168	2,717,298
期末時価	3,085,433	3,241,763

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額であります。

2. 期中増減額のうち、前連結会計年度の主な増加額は不動産取得（72,624千円）であり、主な減少額は減価償却費（77,960千円）、保有目的変更に伴う販売用不動産への振替（308,161千円）であります。

当連結会計年度の主な増加額は不動産取得（25,094千円）であり、主な減少額は減価償却費（70,064千円）、保有目的変更に伴う販売用不動産への振替（23,900千円）であります。

3. 期末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額（指標等を用いて調整を行ったものを含む）であります。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループは、商品先物取引業、金融商品取引業、生命保険、損害保険の募集、LED照明等の販売、ゴルフ場関連事業、不動産業などの複数のわたる事業を営んでおり、業種別に区分された事業ごとに、当社及び連結子会社が各々独立した経営単位として各事業ごとの包括的な事業戦略を立案し、事業活動を展開しております。

したがって、当社グループでは、当社及び連結子会社の各々の事業を基礎としたセグメントから構成されており、「投資・金融サービス業」、「生活・環境事業」、「スポーツ施設提供業」及び「不動産業」の4つを報告セグメントとしております。

「投資・金融サービス業」は商品先物取引及び金融商品取引の受託業務及び自己売買業務を行っております。

「生活・環境事業」は生命保険、損害保険の募集、太陽光発電機・LED照明等の販売、広告用電設資材卸売等を行っております。「スポーツ施設提供業」はゴルフ場関連事業を行っております。「不動産業」は不動産賃貸業、宅地建物取引業を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益又は損失は、営業利益又は損失ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場の実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

(単位：千円)

	報告セグメント					その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結 財務諸表 計上額 (注) 3
	投資・金融 サービス業	生活・環境 事業	スポーツ施 設提供業	不動産業	計				
売上高									
外部顧客への売上高	1,161,585	879,994	450,361	590,745	3,082,686	145,111	3,227,797	—	3,227,797
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	3,068	26	75,900	78,994	3,000	81,994	△81,994	—
計	1,161,585	883,063	450,387	666,645	3,161,681	148,111	3,309,792	△81,994	3,227,797
セグメント利益又は 損失 (△)	△115,073	△13,401	16,881	227,437	115,844	17,208	133,052	△344,019	△210,967
セグメント資産	6,153,962	835,364	1,007,955	6,374,248	14,371,531	63,907	14,435,438	△227,257	14,208,181
その他の項目									
減価償却費	23,595	3,690	24,806	4,719	56,811	422	57,234	10,082	67,317
有形固定資産及び無 形固定資産の増加額	40,740	251,397	48,825	74,377	415,341	428	415,769	—	415,769

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、インターネット広告業等を含んでおります。

2. 調整額は以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失 (△) の調整額△344,019千円には、セグメント間取引消去12,787千円、各報告セグメントに配分していない全社費用△356,806千円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

(2) セグメント資産の調整額△227,257千円には、セグメント間債権の相殺消去△288,395千円、各報告セグメントに配分していない全社資産61,138千円が含まれております。

(3) 減価償却費の調整額10,082千円は、各報告セグメントに配分していない全社費用であります。

3. セグメント利益又は損失 (△) は、連結財務諸表の営業損失と調整を行っております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：千円）

	報告セグメント					その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結 財務諸表 計上額 (注) 3
	投資・金融 サービス業	生活・環境 事業	スポーツ施 設提供業	不動産業	計				
売上高									
外部顧客への売上高	1, 118, 129	927, 699	442, 584	618, 398	3, 106, 811	148, 653	3, 255, 464	—	3, 255, 464
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	4, 356	53	75, 900	80, 310	3, 000	83, 310	△83, 310	—
計	1, 118, 129	932, 056	442, 638	694, 298	3, 187, 121	151, 653	3, 338, 775	△83, 310	3, 255, 464
セグメント利益又は 損失（△）	△229, 506	△50, 094	14, 360	236, 527	△28, 713	22, 228	△6, 485	△337, 946	△344, 431
セグメント資産	6, 659, 292	1, 068, 821	1, 000, 881	6, 490, 328	15, 219, 324	87, 174	15, 306, 499	△377, 084	14, 929, 414
その他の項目									
減価償却費	31, 103	5, 240	21, 556	4, 684	62, 583	440	63, 023	9, 603	72, 627
有形固定資産及び無 形固定資産の増加額	56, 146	257, 140	24, 070	1, 393	338, 750	633	339, 384	—	339, 384

（注） 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、インターネット広告業等を含んでおります。

2. 調整額は以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失（△）の調整額△337, 946千円には、セグメント間取引消去11, 962千円、各報告セグメントに配分していない全社費用△349, 908千円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

(2) セグメント資産の調整額△377, 084千円には、セグメント間債権の相殺消去△435, 415千円、各報告セグメントに配分していない全社資産58, 331千円が含まれております。

(3) 減価償却費の調整額9, 603千円は、各報告セグメントに配分していない全社費用であります。

3. セグメント利益又は損失（△）は、連結財務諸表の営業損失と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：千円）

	投資・金融 サービス業	生活・環境 事業	スポーツ施設 提供業	不動産業	その他	合計
外部顧客への 売上高	1, 161, 585	879, 994	450, 361	590, 745	145, 111	3, 227, 797

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の10%を超えるものはないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：千円）

	投資・金融 サービス業	生活・環境 事業	スポーツ施設 提供業	不動産業	その他	合計
外部顧客への 売上高	1, 118, 129	927, 699	442, 584	618, 398	148, 653	3, 255, 464

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の10%を超えるものはないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

当連結会計年度にエイチ・エスライフ少額短期保険株式会社（平成30年3月1日付けでふくろう少額短期保険株式会社に商号変更）の株式を取得し連結子会社としたことにより、負ののれん発生益16,989千円を計上しております。

なお、負ののれん発生益は特別利益のため、セグメント利益には含めておりません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	896.97円	888.94円
1株当たり当期純損失(△)	△13.60円	△18.94円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純損失(△) (千円)	△128,458	△178,886
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期 純損失(△)(千円)	△128,458	△178,886
期中平均株式数(千株)	9,444	9,444

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	100,000	100,000	0.67	—
1年以内に返済予定の長期借入金	20,400	20,400	1.40	—
1年以内に返済予定のリース債務	—	—	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	121,800	101,400	1.40	平成31年～36年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	—	—	—	—
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	242,200	221,800	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	20,400	20,400	20,400	20,400

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2)【その他】

① 当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
営業収益(百万円)	905	1,629	2,372	3,255
税金等調整前四半期(当期)純損失 (△)(百万円)	△6	△216	△256	△309
親会社株主に帰属する四半期(当期) 純損失(△)(百万円)	△8	△121	△139	△178
1株当たり四半期(当期)純損失 (△)(円)	△0.85	△12.86	△14.76	△18.94

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純損失(△)(円)	△0.85	△12.01	△1.89	△4.19

② 決算日後の状況

特記事項はありません。

③ 訴訟

当社の連結子会社である株式会社フジトミが受託した商品先物取引に関して3件の損害賠償請求事件が現在係争中であり、これは、当該会社の不法行為により損害を被ったとして、当該会社を被告として損害賠償請求を裁判所に提訴したものであり、損害賠償請求額は、23,753千円であります。これに対して当該会社は、何ら不法行為は無かったことを主張しております。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※1 1,823,784	※1 1,753,111
売掛金	939	939
前払費用	4,741	5,124
関係会社短期貸付金	—	100,000
未収入金	12,586	12,456
その他	3,832	4,392
貸倒引当金	△494	△494
流動資産合計	1,845,391	1,875,530
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※1 1,861,710	※1 1,767,571
土地	※1 1,715,962	※1 1,715,962
その他	93,787	84,699
有形固定資産合計	3,671,461	3,568,233
投資その他の資産		
投資有価証券	1,092,729	1,199,620
関係会社株式	1,156,624	1,156,624
長期差入保証金	5,150	5,150
長期貸付金	19,418	18,148
関係会社長期貸付金	270,000	320,000
投資その他の資産合計	2,543,921	2,699,542
固定資産合計	6,215,382	6,267,776
資産合計	8,060,773	8,143,307

(単位：千円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
未払金	12,724	15,827
未払費用	2,286	2,386
1年内返済予定の長期借入金	※1 20,400	※1 20,400
未払法人税等	10,805	15,107
その他	11,140	11,204
流動負債合計	57,356	64,926
固定負債		
長期借入金	※1 121,800	※1 101,400
繰延税金負債	68,111	115,365
退職給付引当金	14,053	15,133
その他	157,146	151,373
固定負債合計	361,111	383,273
負債合計	418,468	448,199
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,000,000	2,000,000
資本剰余金		
資本準備金	887,445	887,445
資本剰余金合計	887,445	887,445
利益剰余金		
利益準備金	360,000	360,000
その他利益剰余金		
別途積立金	4,670,000	4,670,000
繰越利益剰余金	27,149	△28,093
利益剰余金合計	5,057,149	5,001,906
自己株式	△454,376	△454,376
株主資本合計	7,490,218	7,434,976
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	154,328	261,400
繰延ヘッジ損益	△2,241	△1,268
評価・換算差額等合計	152,086	260,131
純資産合計	7,642,305	7,695,107
負債純資産合計	8,060,773	8,143,307

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業収益		
売上高	※1 293,681	※1 292,262
関係会社受取配当金	35,212	35,812
関係会社事務代行収益	3,000	3,000
営業収益合計	331,894	331,075
売上原価	159,319	151,969
営業総利益	172,574	179,106
営業費用		
販売費及び一般管理費	※2 271,119	※2 265,046
営業損失(△)	△98,544	△85,940
営業外収益		
受取利息	4,299	5,176
受取配当金	31,240	31,716
貸倒引当金戻入額	550	—
商品取引事故引当金戻入額	12,653	—
その他	2,754	3,958
営業外収益合計	51,497	40,851
営業外費用		
支払利息	2,145	1,855
その他	750	—
営業外費用合計	2,895	1,855
経常損失(△)	△49,942	△46,944
特別利益		
投資有価証券売却益	8,228	19,286
特別利益合計	8,228	19,286
特別損失		
固定資産除却損	409	—
投資有価証券売却損	73	685
連結納税個別帰属額調整損	14,927	15,692
特別損失合計	15,409	16,377
税引前当期純損失(△)	△57,124	△44,035
法人税、住民税及び事業税	△12,508	△12,403
法人税等合計	△12,508	△12,403
当期純損失(△)	△44,615	△31,631

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本								
	資本金	資本剰余金		利益剰余金				自己株式	株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計		
					別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	2, 000, 000	887, 445	887, 445	360, 000	4, 670, 000	95, 376	5, 125, 376	△454, 376	7, 558, 445
当期変動額									
剰余金の配当						△23, 610	△23, 610		△23, 610
当期純損失（△）						△44, 615	△44, 615		△44, 615
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	－	－	－	－	－	△68, 226	△68, 226	－	△68, 226
当期末残高	2, 000, 000	887, 445	887, 445	360, 000	4, 670, 000	27, 149	5, 057, 149	△454, 376	7, 490, 218

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
当期首残高	160,271	△3,661	156,609	7,715,054
当期変動額				
剰余金の配当				△23,610
当期純損失（△）				△44,615
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△5,942	1,419	△4,522	△4,522
当期変動額合計	△5,942	1,419	△4,522	△72,749
当期末残高	154,328	△2,241	152,086	7,642,305

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本								
	資本金	資本剰余金		利益剰余金				自己株式	株主資本 合計
		資本準備金	資本剰余 金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余 金合計		
					別途積立金	繰越利益 剰余金			
当期首残高	2,000,000	887,445	887,445	360,000	4,670,000	27,149	5,057,149	△454,376	7,490,218
当期変動額									
剰余金の配当						△23,610	△23,610		△23,610
当期純損失（△）						△31,631	△31,631		△31,631
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	－	－	－	－	－	△55,242	△55,242	－	△55,242
当期末残高	2,000,000	887,445	887,445	360,000	4,670,000	△28,093	5,001,906	△454,376	7,434,976

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有 価証券評 価差額金	繰延ヘッジ 損益	評価・換 算差額等 合計	
当期首残高	154,328	△2,241	152,086	7,642,305
当期変動額				
剰余金の配当				△23,610
当期純損失（△）				△31,631
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	107,071	973	108,044	108,044
当期変動額合計	107,071	973	108,044	52,801
当期末残高	261,400	△1,268	260,131	7,695,107

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

子会社株式 移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの 決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの 移動平均法による原価法

(2) デリバティブ 時価法

2. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産

定率法（ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（附属設備を除く）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 5～50年

器具及び備品 3～15年

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき、計上しております。

4. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。また、金利スワップについて特例処理の条件を満たしている場合には特例処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段 金利スワップ

ヘッジ対象 借入金

(3) ヘッジ方針

金利リスクの低減並びに金融収支改善のため、対象債務の範囲内でヘッジを行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、その変動額等を基礎にして有効性を評価しております。

ただし、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式を採用しております。

(2) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(会計方針の変更)

該当事項はありません。

(表示方法の変更)

該当事項はありません。

(追加情報)

該当事項はありません。

(貸借対照表関係)

※1 担保に供している資産及び担保に係る債務
担保に供している資産

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
現金及び預金	250,000千円	250,000千円
建物及び構築物	380,185	363,383
土地	208,043	208,043
計	838,228	821,426

担保に係る債務

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
1年内返済予定長期借入金	20,400千円	20,400千円
長期借入金	121,800	101,400
計	142,200	121,800

2 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行1行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
当座貸越極度額	250,000千円	250,000千円
借入実行残高	—	—
差引額	250,000	250,000

3 保証債務

他の会社の金融機関等からの借入債務に対し、保証を行っております。

債務保証

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
株式会社三新電業社	100,000千円	100,000千円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	75,900千円	75,900千円

※2 販売費及び一般管理費の主な内訳（販売費及び一般管理費のうち販売費に属する費用の割合は軽微であります。）

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
人件費	131,389千円	130,471千円
租税公課	33,274千円	26,117千円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度（平成29年3月31日）

	貸借対照表計上額（千円）	時価（千円）	差額（千円）
子会社株式	809,624	1,044,640	235,016

当事業年度（平成30年3月31日）

	貸借対照表計上額（千円）	時価（千円）	差額（千円）
子会社株式	809,624	952,257	142,633

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式

(単位：千円)

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
子会社株式	347,000	347,000

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「子会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
	千円	千円
繰延税金資産		
電話加入権	8,387	8,387
固定資産	1,333	1,333
投資有価証券	6,892	6,892
税務上の繰越欠損金	2,055,148	1,475,167
差入保証金	1,500	1,500
退職給付引当金	4,303	4,633
その他	4,605	3,642
繰延税金資産小計	2,082,171	1,501,558
評価性引当額	△2,082,171	△1,501,558
繰延税金資産合計	—	—
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△68,111	△115,365
繰延税金負債合計	△68,111	△115,365
繰延税金負債の純額	△68,111	△115,365

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

税引前当期純損失を計上しているため記載しておりません。

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区 分	資産の種類	当期首 残高	当 期 増加額	当 期 減少額	当 期 償却額	当期末 残高	減価償却 累計額
有形固 定資産	建物	1,850,559	1,150	—	93,753	1,757,955	825,196
	構築物	11,151	—	—	1,534	9,616	32,167
	車両	0	—	—	—	0	770
	器具及び備品	93,787	793	—	9,881	84,699	97,669
	土地	1,715,962	—	—	—	1,715,962	—
	計	3,671,461	1,943	—	105,170	3,568,233	955,803

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	494	—	—	494

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り及び買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	_____
買取り及び買増し手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告ができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL http://www.kobayashiyoko.com/ir/
株主に対する特典	毎年3月31日の最終の株主名簿に記載されている100株以上1,000株未満の保有株主に対しおこめ券2枚を、1,000株以上の保有株主に対しておこめ券5枚を贈呈します。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株式予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有していません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第70期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）平成29年6月30日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成29年6月30日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第71期第1四半期）（自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日）平成29年8月14日関東財務局長に提出

（第71期第2四半期）（自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日）平成29年11月14日関東財務局長に提出

（第71期第3四半期）（自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日）平成30年2月14日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

平成29年7月3日関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月28日

株式会社小林洋行
取締役会 御中

至誠清新監査法人

代表社員
業務執行社員 公認会計士 吉村 智明 印

代表社員
業務執行社員 公認会計士 浅井 清澄 印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社小林洋行の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社小林洋行及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社小林洋行の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社小林洋行が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月28日

株式会社小林洋行
取締役会 御中

至誠清新監査法人

代表社員
業務執行社員 公認会計士 吉村 智明 印

代表社員
業務執行社員 公認会計士 浅井 清澄 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社小林洋行の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第71期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社小林洋行の平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月29日
【会社名】	株式会社小林洋行
【英訳名】	KOBAYASHI YOKO CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 細金 成光
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目15番7号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長細金成光は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の改訂について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止または発見することができない可能性があります。

2【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しました。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況の評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社3社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。なお、連結子会社3社及び持分法適用関連会社1社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2／3に達している3事業拠点を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として受取手数料及び売買損益に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測に伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業または業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5【特記事項】

特記すべき事項はありません。